地質学雑誌　第118巻　第4号（通巻1399号）付録　昭和27年6月10日第三種郵便物認可　平成24年4月15日発行（毎月1回15日発行）

日本地質学会 *News*

Vol.15 No.4 April 2012

開催通知

一般社団法人日本地質学会第４回総会開催について

一般社団法人日本地質学会第４回総会を次の次第により開催いたします．

2012年４月７日
(社)日本地質学会　会長　宮下　純夫

2012年５月19日（土）　14：30〜16：00
会場　北とぴあ　第２研修室
（東京都北区王子１-11-１）

１．開会
２．議長選出
３．議案
　第１号議案　理事会報告
　第２号議案　2011年度事業・決算報告
　第３号議案　定款改正
　第４号議案　役員辞任
　第５号議案　代議員および理事・監事選挙報告
　第６号議案　2012年度事業計画
　第７号議案　2012年度予算案
　第８号議案　名誉会員の選出
４．閉会

１．定款第20条により本総会は役員ならびに代議員による総会となります．ただし定款により正会員は総会に陪席することができます．
２．定款第28条第１項により，代議員には別途，総会開催通知ならびに総会規則にもとづく議決権行使書，委任状などをお送りいたします．ご都合で欠席される方は，議決権行使書または委任状を提出してください．

第３回惑星地球フォトコンテスト表彰式

＊総会開催の直前に行いますので，総会出席の代議員，一般会員の方も是非ご出席ください．
５月19日（土）
13:30〜14:30　北とぴあ第２研修室
１．表彰式
２．審査委員長（白尾元理会員）による入賞作品の講評

入選作品展示

４月21日（土）〜６月３日（日）
会　　場：千葉県立中央博物館（千葉市中央区青葉町955-２）
開館時間：9:00〜16:30（入館は16:00まで）
休 館 日：毎週月曜日（ただし，４/30は開館，５/１は休館）
入 館 料：一般300円，高校・大学生150円中学生以下及び65歳以上は無料

日本地質学会*News*

Vol.15 No.4 April 2012

The Geological Society of Japan *News*
一般社団法人日本地質学会
〒101－0032　東京都千代田区岩本町２－８－15　井桁ビル　６Ｆ
編集委員長　内藤一樹
TEL　03－5823－1150　FAX　03－5823－1156
main@geosociety.jp（庶務一般）
journal@geosociety.jp（編集）
http://www.geosociety.jp

Contents

一般社団法人日本地質学会
理事選挙および監事選挙結果のお知らせ ……2

大阪大会：シンポジウム，トピック／レギュラーセッションが決まりました……6

公募 ……7
島根大学総合理工学部地球資源環境学科教員公募/名古屋大学大学院環境学研究科地球環境科学専攻教員（教授または准教授）公募/名古屋大学博物館教員公募

各賞・研究助成 ……8
第３回（平成24年度）日本学術振興会 育志賞 受賞候補者の推薦

紹介 ……9
地球全史：写真が語る46億年の奇跡　写真：白尾元理・解説：清川昌一（伊藤　孝）/クラカトアの大噴火　世界の歴史を動かした火山サイモン・ウィンチェスター著　柴田裕之訳（石渡　明）/日本の地形・地質　見てみたい大地の風景116　写真：北中康文，解説：斎藤眞・下司信夫・渡辺真人（石原舜三）

TOPIC ……13
新潟大学・糸魚川市合同調査および普及活動（茨木洋介・松岡　篤）/世界のＭ９地震と地質学の課題（石渡　明）

第３回惑星地球フォトコンテスト審査結果 ……18

学協会・研究会報告 ……22
国際地質学史委員会（INHIGEO）2011年年会（豊橋・愛知大学）報告　Report：International Commission on the History of Geological Sciences （INHIGEO）annual Conference 2011（Japan）（猪俣道也・鈴木尉元）

CALENDAR ……24

博物館だより ……25
産業技術総合研究所　地質標本館　特別展：砂漠を歩いてマントルへ― 中東オマーンの地質探訪　Desert to Mantle: Exploring Oman's geology

支部コーナー ……26
中部支部：中部支部2012年年会開催のお知らせ

学会記事 ……27
一般社団法人日本地質学会2011年度第３回理事会議事録/2011年度第５回執行理事会議事録/2011年度第６回執行理事会議事録/2011年度第７回執行理事会議事録/2011年度第８回執行理事会議事録/2011年度第９回執行理事会議事録

追悼 ……36
長岡信治教授の急逝を悼む（奥野　充）

表紙紹介

第３回惑星地球フォトコンテスト最優秀賞
『27億年前の鉄鉱山』　清川昌一［一般］

撮影者より：ブラジルはオーストラリアとともに，世界の鉄を供給する重要な場所である．深度200m以上の著しい風化作用を被っており，地層は非常に柔らかである．逆断層にそった地質構造にそって露天掘りをしており，中央の黒い部分に新鮮なヘマタイト層がみられる．黄色い部分はゲーサイト化している部分．日曜日なので作業はしていなかった．

講評：世界の鉄鉱床の大部分は27億～25億年前，海中に酸素が豊富になった時期にできたものです．作者はプロの地質研究者で専門は先カンブリア時代の地質ですから，このような場所で撮影できたのでしょう．とはいっても，太陽光の当たり具合や構図はよく計算されており，巨大な鉄鉱山のようすを余すところなく表現されています．行って見たくなるような作品です．
（白尾　元理）

事務局営業カレンダー

お休み　＊印は振替休日です

4月/April

SUN	MON	TUE	WED	THU	FRI	SAT
1	2*	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30					

5月/May

SUN	MON	TUE	WED	THU	FRI	SAT
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31		

5/19：事務局は不在です．

印刷・製本：日本印刷株式会社　東京都文京区湯島３－20－12

2012年３月14日

会員各位

一般社団法人日本地質学会　選挙管理委員会
委員長　兼子 尚知

理事選挙および監事選挙結果のお知らせ

選挙規則ならびに選挙細則にもとづき，一般社団法人日本地質学会理事選挙および監事選挙を実施いたしましたので，下記の通りご報告いたします．

記

１．理事選挙

（１）理事立候補者が全国区代議員からの選出定数（43名）を超えたため，新代議員による投票を行いました．

（２）理事選挙実施結果

有権者総数	183名
投票用紙発送数	183通
投票総数	120通
有効投票数	119票　／　無効投票数　１票

２．監事選挙

監事立候補者は定数内（会員からの立候補：１名）であったため，無投票当選といたしました．

３．理事投票結果ならびに当選者の名簿は次のとおりです．

（１）理事選挙による選出〔定数43名／立候補者数48名〕　※任期：2012年総会終了後～2014年総会まで

◆階層（所属）別充足数　当選（「大学院生」所属の立候補者はありませんでした）

	立候補者名	所属機関名	所属階層	得票	定数
当	石渡 明	東北大学東北アジア研究センター	**大学**	91	1
当	高木 秀雄	早稲田大学	**大学**	90	2
当	星 博幸	愛知教育大学	**大学**	89	3
当	久田 健一郎	筑波大学	**大学**	84	4
当	ウォリス サイモン	名古屋大学	**大学**	82	5
当	山路 敦	京都大学	**大学**	82	6
当	芝川 明義	大阪府立花園高等学校	**小中高**	37	7
当	渡部 芳夫	産業技術総合研究所	**官公庁等**	86	8
当	斎藤 眞	産業技術総合研究所	**官公庁等**	86	9
当	坂口 有人	海洋研究開発機構	**官公庁等**	78	10
当	中澤 努	産業技術総合研究所	**官公庁等**	75	11
当	平田 大二	神奈川県立生命の星・地球博物館	**官公庁等**	68	12
当	脇田 浩二	産業技術総合研究所	**官公庁等**	68	13
当	向山 栄	国際航業㈱	**会社**	76	14
当	山本 高司	川崎地質㈱	**会社**	75	15
当	佐々木 和彦	応用地質㈱	**会社**	66	16
当	松田 達生	NPO法人リアルタイム地震情報利用協議会	**会社**	49	17
当	市川 八州夫	応用地質㈱	**会社**	38	18
当	田村 嘉之	千葉県環境財団	**会社**	29	19

◆階層外　得票数順

	立候補者名	所属機関名	所属階層	得票	定数
当	藤本 光一郎	東京学芸大学	大学	81	20
当	小嶋 智	岐阜大学	大学	78	21
当	井龍 康文	名古屋大学	大学	77	22
当	宮下 純夫	新潟大学	大学	75	23
当	保柳 康一	信州大学	大学	74	24
当	伊藤 慎	千葉大学	大学	72	25
当	西 弘嗣	東北大学総合学術博物館	大学	71	26
当	竹下 徹	北海道大学	大学	70	27
当	安藤 寿男	茨城大学	大学	70	28
当	高橋 正樹	日本大学	大学	68	29
当	小山内 康人	九州大学	大学	67	30
当	天野 一男	茨城大学	大学	64	31
当	藤林 紀枝	新潟大学	大学	63	32
当	笠間 友博	神奈川県立生命の星・地球博物館	官公庁等	63	33

当	内藤 一樹	産業技術総合研究所	官公庁等	62	34
当	矢島 道子	東京医科歯科大学	大学	60	35
当	狩野 彰宏	九州大学	大学	58	36
当	山口 耕生	東邦大学	大学	57	37
当	松田 博貴	熊本大学	大学	56	38
当	川辺 文久	文部科学省	官公庁等	54	39
当	清川 昌一	九州大学	大学	51	40
当	山田 泰広	京都大学	大学	50	41
当	柴 正博	東海大学社会教育センター	大学	49	42
当	川端 清司	大阪市立自然史博物館	官公庁等	48	43
	七山 太	産業技術総合研究所	官公庁等	42	
	林 愛明	静岡大学	大学	39	
	池田 保夫	北海道教育大学釧路校	大学	32	
	澤口 隆	東洋大学	大学	32	
	北村 有迅	海洋研究開発機構	官公庁等	30	

※理事当選者は代議員ではなくなります．なお，当選にいたらなかった候補者は代議員です．

（2）地方支部区選出〔定数7名〕　※任期：2012年総会終了後～2014年総会まで

支部区	立候補者名	所属機関名	所属階層	得票
北海道	大津 直	北海道立総合研究機構	官公庁等	(43)
東北	永広 昌之	東北大学総合学術博物館	大学	(47)
関東	伊藤 谷生	帝京平成大学	大学	(149)
中部★	竹内 誠	名古屋大学	大学	(78)
近畿	宮田 隆夫	神戸大学	大学	(51)
四国	村田 明広	徳島大学	大学	(22)
西日本	太田 泰弘	北九州市立自然史・歴史博物館	官公庁等	(62)

★中部支部区選出理事は，代議員選挙（地方支部区）の得票数１位同数２名のくじ引きにより選出．
※理事当選者は代議員ではなくなります．

4．監事名簿は次のとおりです．　※任期：2012年総会終了後～2016年総会まで

立候補者名	所属機関名	会員・非会員の別
山本 正司	司法書士山本正司事務所	非会員
青野 道夫	㈱サンコア	会員

5．代議員選出者名簿は次のとおりです．（既報）

（1）全国区代議員（52名：理事選挙による選出者は除く）　※任期：2012年総会終了後～2014年総会まで

立候補者名	所属機関名	所属階層
七山 太	産業技術総合研究所	官公庁等
福冨 幹男	㈱カミナガ	会社
北村 有迅	海洋研究開発機構	官公庁等
北原 哲郎	応用地質㈱	会社
松本 良	東京大学	大学
澤口 隆	東洋大学	大学
竹内 章	富山大学	大学
道林 克禎	静岡大学	大学
村山 雅史	高知大学海洋コア総合研究センター	大学
吉川 敏之	産業技術総合研究所	官公庁等
上砂 正一	環境地質コンサルタント	会社
岡本 真琴	九州国際大学	大学
小荒井 衛	国土地理院	官公庁等
細井 淳	茨城大学	大学院生
林 愛明	静岡大学	大学
荒戸 裕之	国際石油開発帝石㈱	会社
磯崎 行雄	東京大学	大学
稲場 土誌典	国際石油開発帝石㈱	会社
海野 進	金沢大学	大学
坂島 俊彦	パシフィックコンサルタンツ㈱	会社
橋本 善孝	高知大学	大学
原山 智	信州大学	大学
松原 典孝	兵庫県立大学自然・環境科学研究所	大学
池田 保夫	北海道教育大学釧路校	大学
岩森 光	東京工業大学	大学
卜部 厚志	新潟大学災害・復興科学研究所	大学

岡本 敦	東北大学	大学
亀尾 浩司	千葉大学	大学
小宮 剛	東京大学	大学
紺谷 吉弘	立命館高等学校	小中高
榊原 正幸	愛媛大学	大学
佐野 弘好	九州大学	大学
重松 紀生	文部科学省研究開発局	官公庁等
杉田 律子	科学警察研究所	官公庁等
角替 敏昭	筑波大学	大学
中井 均	都留文科大学	大学
長濱 裕幸	東北大学	大学
奈良 正和	高知大学	大学
西岡 芳晴	産業技術総合研究所	官公庁等
楡井 久	ＮＰＯ法人日本地質汚染審査機構	会社
針金 由美子	産業技術総合研究所	官公庁等
福田 惇一	東北大学	大学
藤縄 明彦	茨城大学	大学
町山 栄章	海洋研究開発機構	官公庁等
松岡 篤	新潟大学	大学
三次 徳二	大分大学	大学
宮崎 一博	産業技術総合研究所	官公庁等
武藤 潤	東北大学	大学
大友 幸子	山形大学	大学
荒井 晃作	産業技術総合研究所	官公庁等
須藤 斎	名古屋大学	大学
香東 卓郎	獨協埼玉中学高等学校	小中高

（２）地方支部区代議員（81名：各支部区得票数１位のかたは，地方支部区選出枠の理事となるので除く．ただし，中部支部区は１位２名から，くじ引きにより理事を選出.）　※任期：2012年総会終了後～2014年総会まで

北海道：定員５，選出数４

順位	氏名	所属	所属階層	得票
２．	山本 正伸	北海道大学	大学	(41)
３．	横山 光	北海道立教育研究所附属理科教育センター	小中高	(37)
４．	鈴木 明彦	北海道教育大学札幌校	大学	(34)

東北：定員７，選出数７

順位	氏名	所属	所属階層	得票
２．	土谷 信高	岩手大学	大学	(36)
２．	中村 教博	東北大学	大学	(36)
４．	加々島 慎一	山形大学	大学	(29)
５．	菖蒲 幸男	応用地質㈱	会社	(28)
５．	西川 治	秋田大学	大学	(28)
７．	鎌滝 孝信	秋田大学地域創生センター	大学	(24)

関東：定員　42，選出数42

順位	氏名	所属	所属階層	得票
２．	川村 喜一郎	深田地質研究所	会社	(146)
３．	佐藤 比呂志	東京大学地震研究所	大学	(137)
４．	小松原 純子	産業技術総合研究所	官公庁等	(131)
５．	木村 克己	産業技術総合研究所	官公庁等	(114)
６．	亀高 正男	㈱ダイヤコンサルタント	会社	(113)
６．	森田 澄人	産業技術総合研究所	官公庁等	(113)
８．	中山 俊雄	なし	その他	(109)
９．	中島 礼	産業技術総合研究所	官公庁等	(108)
10.	飛田 健二	応用地質㈱	会社	(107)
11.	松浦 一樹	㈱ダイヤコンサルタント	会社	(106)
11.	古川 竜太	産業技術総合研究所	官公庁等	(106)
13.	竹内 圭史	産業技術総合研究所	官公庁等	(105)
14.	植木 岳雪	産業技術総合研究所	官公庁等	(104)
15.	小田原 啓	神奈川県温泉地学研究所	官公庁等	(103)
16.	荒井 健一	アジア航測㈱	会社	(100)
17.	原 英俊	産業技術総合研究所	官公庁等	(99)
18.	利光 誠一	産業技術総合研究所	官公庁等	(98)
19.	石川 正弘	横浜国立大学	大学	(97)
19.	緒方 信一	中央開発㈱	会社	(97)

21.	半場 康弘	川崎地質㈱	会社	(95)
21.	細矢 卓志	中央開発㈱	会社	(95)
23.	吉岡 正	応用地質㈱	会社	(89)
23.	安藤 伸	応用地質㈱	会社	(89)
23.	小尾 靖	神奈川県立相模原青陵高等学校	小中高	(89)
26.	本田 尚正	茨城大学	大学	(88)
26.	河村 知徳	石油資源開発㈱	会社	(88)
28.	川浪 聖志	明治コンサルタント㈱	会社	(87)
29.	工藤 崇	産業技術総合研究所	官公庁等	(85)
30.	石山 達也	東京大学地震研究所	大学	(83)
31.	大橋 聖和	千葉大学	大学	(82)
32.	加藤 潔	駒澤大学	大学	(81)
32.	渡邊 貴央	応用地質㈱	会社	(81)
34.	方違 重治	なし	その他	(80)
34.	中村 克	応用地質㈱	会社	(80)
36.	入野 寛彦	㈱地圏総合コンサルタント	会社	(79)
36.	関 陽児	産業技術総合研究所	官公庁等	(79)
38.	藤井 正博	応用地質㈱	会社	(78)
39.	外田 智千	国立極地研究所	官公庁等	(77)
39.	野々垣 進	産業技術総合研究所	官公庁等	(77)
41.	小安 孝幸	東電設計㈱	会社	(71)
42.	佐藤 剛	帝京平成大学	大学	(62)

中部：定員17，選出数17

順位	氏名	所属	所属階層	得票
1.	吉田 英一	名古屋大学博物館	大学	(78)
3.	吉田 孝紀	信州大学	大学	(71)
4.	東田 和弘	名古屋大学	大学	(68)
5.	延原 尊美	静岡大学	大学	(63)
5.	豊島 剛志	新潟大学	大学	(63)
7.	北村 晃寿	静岡大学	大学	(61)
7.	大藤 茂	富山大学	大学	(61)
9.	大谷 具幸	岐阜大学	大学	(59)
10.	栗田 裕司	新潟大学	大学	(58)
10.	長谷部 徳子	金沢大学	大学	(58)
12.	鎌田 雅道	応用地質㈱	会社	(57)
13.	永田 秀尚	㈲風水土	会社	(56)
13.	石田 桂	信州大学	大学	(56)
15.	椚座 圭太郎	富山大学	大学	(54)
15.	水上 知行	金沢大学	大学	(54)
17.	森下 知晃	金沢大学	大学	(53)

近畿：定員11，選出数11

順位	氏名	所属	所属階層	得票
2.	三田村 宗樹	大阪市立大学	大学	(50)
3.	奥平 敬元	大阪市立大学	大学	(37)
4.	此松 昌彦	和歌山大学	大学	(34)
5.	石井 和彦	大阪府立大学	大学	(32)
5.	里口 保文	滋賀県立博物館	官公庁等	(32)
5.	田中 里志	京都教育大学	大学	(32)
8.	竹村 静夫	兵庫教育大学	大学	(30)
9.	小林 文夫	兵庫県立大学	大学	(27)
10.	大串 健一	神戸大学	大学	(26)
10.	和田 穣隆	奈良教育大学	大学	(26)

四国：定員４，選出数３

順位	氏名	所属	所属階層	得票
2.	佐野 栄	愛媛大学	大学	(18)
3.	向吉 秀樹	㈱マリン・ワーク・ジャパン	会社	(14)

西日本：定員14，選出数４

順位	氏名	所属	所属階層	得票
2.	磯部 博志	熊本大学	大学	(60)
3.	宮本 知治	九州大学	大学	(47)
4.	石原 与四郎	福岡大学	大学	(43)

大阪大会ニュース

シンポジウム，トピック／レギュラーセッションが決まりました

今年の第119年学術大会（大阪大会：９月15日～17日開催）では下記のシンポジウム・セッションを予定しております．このほかにも市民講演会や地質情報展，国際ワークショップなど，多数の関連事業を企画・準備中です．募集・予告記事は次号ニュース誌５月号に掲載します．また，講演申込や参加登録は５月末頃受付開始予定です．

日本地質学会行事委員会

シンポジウム

タイトル	世話人/担当	備考
S1. 上町断層の地下構造と運動像 ―都市域伏在活断層の地質学―	竹村恵二・三田村宗樹・末廣匡基	近畿支部企画，９/16午前
S2. 西日本の海溝型地震と津波を考える（仮題）	未定	執行理事会社会貢献部会・近畿支部合同企画，９/17午前

トピックセッション

T1. 地質情報の利活用	斎藤　眞・野々垣　進	
T2. プレート収束境界の堆積盆形成：構造・堆積作用・テクトニクス	伊藤康人・高野　修	
T3. 地層処分と地球科学	吉田英一・高橋正樹・梅田浩司・渡部芳夫	
T4. 地球史イベント大事件７：地層に残される地球史変動（宇宙，環境，テクトニクス，生物活動）	清川昌一・山口耕生・小宮　剛・尾上哲治・黒田潤一郎	
T5. 沈み込み帯地震発生帯研究の新たな進展	橋本善孝・氏家恒太郎・金川久一・斎藤実篤・芦　寿一郎・木村　学	
T6. 顕生代の生物多様性変化：急激な増加／減少のパタンと要因	磯崎行雄・小宮　剛・川幡穂高	
T7. ジルコン学	山本伸次・青木一勝・牧　賢志・昆　慶明	
T8. 新学習指導要領の実施で地学教育はどのように変わるか？	中井　均・浅野俊雄・芝川明義	
T9. 地殻流体のダイナミズム その２	竹下　徹・岡本和明	
T10. ジュラ系＋	松岡　篤・小松俊文・近藤康生・石田直人・中田健太郎	
T11. 西南日本地体構造論の現代的問題点（市川浩一郎追悼セッション）	磯崎行雄・前島　渉・堀　利栄	

レギュラーセッション

R1. 深成岩・火山岩とマグマプロセス	火山部会・岩石部会	
R2. 岩石・鉱物・鉱床学一般	岩石部会	
R3. 噴火・火山発達史と噴出物	火山部会	
R4. 変成岩とテクトニクス	岩石部会	
R5. 地域地質・地域層序	地域地質部会・層序部会	
R6. 地域間層序対比と年代層序スケール	層序部会	
R7. 海洋地質	海洋地質部会	
R8. 堆積物（岩）の起源・組織・組成	堆積地質部会	
R9. 炭酸塩岩の起源と地球環境	堆積地質部会	
R10. 堆積相・堆積過程	現行地質過程部会・堆積地質部会	
R11. 石油・石炭地質学と有機地球化学	石油・石炭関係・堆積地質部会	
R12. 岩石・鉱物の破壊と変形	構造地質部会	
R13. 付加体	構造地質部会	
R14. テクトニクス	構造地質部会	
R15. 古生物	古生物部会	
R16. 情報地質	情報地質部会	
R17. 環境地質	環境地質部会	
R18. 応用地質学一般およびノンテクトニック構造	応用地質部会	
R19. 地学教育・地学史	地学教育委員会	
R20. 第四紀地質	第四紀地質部会	

公募

教官公募等の求人ニュース原稿につきましては，採用結果をお知らせいただけますようお願い致します．

島根大学総合理工学部 地球資源環境学科教員公募

1．職名・人員：　教授　1名
2．専門分野：　　応用地質学
3．応募資格・条件：
・博士の学位を有すること．ただし，工学，理学，農学等，学位の分野は問わない．
・地質学との関わりをもち，野外（現場）での教育・研究が可能なこと．
・自然ハザードおよび自然災害に関連する教育・研究が可能なこと．
・社会との関連を理解し，自然災害分野の地域貢献が出来ること．
4．担当授業科目：
・自然災害工学分野および学科共通の専門教育科目の講義・実習等，専門基礎教育科目および共通教養科目の講義の一部を担当する．併せて，大学院総合理工学研究科の講義も担当する．
・自然災害工学分野が開講する科目については，「自然災害工学概論」，「防災工学」，「自然災害学」，「岩盤力学」，「自然災害工学実験」，「自然災害工学演習」等がある．
　なお，島根大学，大学院総合理工学研究科および総合理工学部地球資源環境学科の教育・研究組織，教育目標，カリキュラム等については，それぞれのホームページ
http://www.shimane-u.ac.jp/,
http://shimane-riko.jp/,
http://www.geo.shimane-u.ac.jp/
をご参照下さい．
5．着任時期：　平成24年10月1日
6．提出書類：
(1) 履歴書
(2) 研究業績リスト
（学会などでの発表は除く．研究論文については査読の有無を区別のこと）
(3) 特許，資格など
(4) 教育についてのこれまでの経過と今後の抱負（1000字程度）
(5) 研究についてのこれまでの経過と今後の抱負（1000字程度）
(6) 学界での貢献，社会貢献についての実績
(7) 研究論文の別刷りまたはコピー（主要なもの10編以内）
(8) 応募者についてご意見を頂ける方2名の氏名とその連絡先
7．応募締め切り：**平成24年5月18日（金）（必着）**
8．書類提出先：
〒690-8504　松江市西川津町1060
島根大学大学院総合理工学研究科地球資源環境学領域
平成24年度領域長　石賀裕明
TEL/FAX：0852-32-6459
E-mail：ishiga@riko.shimane-u.ac.jp
9．応募上の注意：応募書類は封筒に「地球資源環境学領域教員応募」と朱書きし，簡易書留にて郵送のこと．なお，応募書類は返却しませんので，ご了承ください．

名古屋大学大学院環境学研究科地球環境科学専攻教員（教授または准教授）公募

1．職種・人員　教授または准教授1名
2．担当講座　地球環境科学専攻（地球惑星科学系）地質・地球生物学講座
3．専門分野　地質学，特に古生物学・古環境学分野
4．公募の趣旨
　地質・地球生物学講座は，年代測定総合研究センターや博物館所属の地質系教員と密に連携して，構造地質学・古生物学・岩石学の3分野を中心として教育・研究を行っています（同講座のホームページ[*1]を参照して下さい）．同講座の教員[*2]は，それぞれの専門性を活かして，地球表層～マントルを構成する物質の形成史とそのメカニズム，テクトニクス，生物と地球環境の相互作用等の素過程を解明し，地球史を高精度で復元することを主たる目的として研究を行っています．そして，過去および現在の地球像を正確に描き出すとともに，地球環境変動の未来像の構築に向けて適切な提言をして，理学の立場から環境学分野の研究に対して貢献することを目指しています．
　地質・地球生物学講座は，同講座の教員と協力して地質学分野の教育・研究を行っていただける教員を募集します．また，大学院環境学研究科，理学部地球惑星科学科および全学教育において，講義，セミナーや実験を担当していただきます．
5．応募資格
(1) 博士の学位を有すること
(2) 地質学，特に古生物学・古環境学分野の研究・教育に実績があり，野外調査に基づいたこの分野の研究・教育を推進できること
(3) 学部や大学院において地質学分野の科目を担当できること
(4) 教育と研究指導を日本語でできること（現在は困難であっても5年を目処に）
6．着任予定時期
平成24年10月1日以降なるべく早い時期
7．提出書類
(1) 履歴書（写真貼付，e-mailアドレスを連絡先として明記のこと）
(2) これまでの研究・教育の経過について要約した文書（2,000字程度）
(3) 研究業績目録（以下のA, B, CおよびDに分類したもの）
A. 査読のある論文および総説（可能な限り，Web of Scienceなどの被引用数を併記すること），B. 査読のない論文および総説，C. 著書，D. その他特に参考となる出版物
(4) 今後の教育・研究計画と管理運営の抱負についての文書（2,000字程度）
(5) 外部資金獲得状況（資金名，期間，金額，代表／分担の別），受賞歴
(6) 応募者についてご意見をいただける方2名の氏名と連絡先
(7) 主な研究論文5編の別刷またはコピーを各1部
8．応募方法・締め切り
平成24年6月29日（金）必着
「地質・地球生物学講座教員応募書類在中」と朱書し，簡易書留にて郵送願います．また，封書とは別に応募書類は電子ファイル（PDF）として電子メールで（1）－（6）と（7）に分割してお送りください．
電子メールのヘッダ（To, Subject）は
To：apply-geol@eps.nagoya-u.ac.jp
Subject：地質・地球生物学講座教員応募，として下さい．
書類の送付及び問い合わせ先
〒464-8601
名古屋市千種区不老町D2-2（510）
名古屋大学大学院環境学研究科
地球惑星科学系長
山本鋼志
電話：052-789-2522
e-mail：apply-geol@eps.nagoya-u.ac.jp
9．選考方法
　基本的に提出書類に基づいて選考を行いますが，選考の過程で応募者に対して面接を実施する場合があります．
10. その他
　教育・研究の力量の評価において，同等と認められる場合は，女性を積極的に採用します．応募書類は返却しません．選考終了後，応募書類は責任を持って破棄します．
　地球環境科学専攻は，地球惑星科学系と大気水圏科学系から成ります．今回の公募を行う地球惑星科学系は，地球環境システム学講座，地質・地球生物学講座，地球化学講座，地球惑星物理学講座の4つの基幹講座と，地球惑星ダイナミクス講座（環境学研究科附属地震火山研究センター）および地球史学講座（博物館，年代測定総合研究センター）の2つの協力講座から成ります．また，理学部地球惑星科学科を兼担しています．当専攻および学部の概要は，それぞれ以下を参照してください．
http://www.env.nagoya-u.ac.jp/earth/index.html
http://www.eps.nagoya-u.ac.jp/
[*1] 地質・地球生物学講座のホームページについては以下を参照してください．
http://nagoyaseiken.com/GeoandGeobio/GGhome.htm

*2 地質・地球生物学講座の平成24年４月現在の構成教員は以下の通りです．
〈教授〉榎並正樹，ウオリス・サイモン，竹内　誠 〈准教授〉氏原　温
〈G30特任准教授〉ハンブレ・マーク
〈講師〉林　誠司 〈助教〉須藤　斎

名古屋大学博物館教員公募

１．公募職種
名古屋大学博物館　特任助教（１名）

２．任　　期
５年（任用日から平成29年３月31日まで）

３．任用予定年月
平成24年７月以降のなるべく早い時期

４．応募資格・要件
(1) フィールドワークをベースにした地質学，地球化学等に関する研究者で，モンゴルを含む中央アジアの自然史研究に意欲を持って取り組むことができること．
(2) XRF，ICP-MS，SEMまたはEDX等の分析機器を用いた研究の経験を有し，それらの機器の保守管理ができること．
(3) 採用後，モンゴル国立科学技術大学内における名古屋大学フィールドリサーチセンター（ウランバートル市内）での長期滞在が可能であること．
(4) 博物館における教育研究活動を専任教員と連携して実施できること．
(5) 博士の学位を有すること．

５．提出書類
(1) 履歴書（写真を貼付のこと）
(2) 研究業績一覧（一覧に加えて，著書・学術論文（査読の有無を明記）のうち，主要なもの３編について別刷り又はコピーを添付のこと）
(3) これまでの研究業績の概要を1000字程度にまとめること
(4) 就任後の抱負（日本とモンゴルの教育研究協力への関心並びに将来計画等について1500字程度にまとめること）
(5) 参考意見を伺える方２名の氏名と連絡先

６．応募締切　**平成24年５月15日（火）必着**

７．選考方法
選考委員会による審査をもとに，名古屋大学博物館運営委員会で最終候補者を選考する．なお，場合によっては選考委員会で面接を行なうこともある．

８．問い合わせ先
名古屋大学博物館 吉田英一
（〒464-8601 名古屋市千種区不老町
電子メールでの連絡先
dora@num.nagoya-u.ac.jp）

９．応募書類送付先
〒464-8601　名古屋市千種区不老町 名古屋大学博物館
電話：052（789）5767（直通），
FAX：052（789）5896
（応募書類の封筒に「特任助教応募書類在中」と朱書し，簡易書留で郵送のこと）
個人情報は本件以外の目的には使用しません．なお，提出書類は申し出がなければ返却しません．

各賞・研究助成

日本地質学会に寄せられた候補者の推薦依頼をご案内いたします．推薦ご希望の方は，執行理事会までお申し込み下さい．

第３回（平成24年度）日本学術振興会 育志賞 受賞候補者の推薦

１．趣旨
天皇陛下の御即位20年に当たり，社会的に厳しい経済環境の中で，勉学や研究に励んでいる若手研究者を支援・奨励するための事業の資として，平成21年に陛下から御下賜金を賜りました．
このような陛下のお気持ちを受けて，将来，我が国の学術研究の発展に寄与することが期待される優秀な大学院博士課程学生を顕彰することを目的として，平成22年度に「日本学術振興会　育志賞」を創設しました．

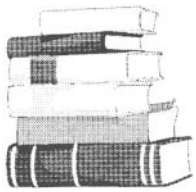
２．対象分野
人文・社会科学及び自然科学の全分野とします．

３．対象者
平成24年４月１日現在34歳未満であり，次の①又は②に該当する者であって，平成24年５月１日において我が国の大学院博士後期課程に（医学，歯学又は獣医学を履修する４年制の博士課程含む）に在学している下記のいずれかの条件を満たす者
① 大学院における学業成績が優秀であり，豊かな人間性を備え，意欲的かつ主体的に勉学及び研究活動に取り組んでいる大学院生であって，当該大学長から推薦された者
② ①に相当する大学院生であるとして所属する学会長から推薦された者
また，海外からの留学生で大学院博士後期課程に在学する者についても，推薦することができます．

４．総授賞数
本会が設置する選考委員会において16名程度選考します．

５．受付期間
平成24年６月13日（水）～６月15日（金）（期間中必着）［学会締切５/30］

６．提出先
〒102-8472　東京都千代田区一番町８番地
独立行政法人　日本学術振興会
総務部　研究者養成課「日本学術振興会育志賞」担当
Tel：03-3263-0912
URL　http://www.jsps.go.jp/j-ikushi-prize/index.html
※様式は上記HPよりダウンロードしてください．昨年度の様式から変更されている箇所がありますのでご注意ください．
※推薦募集ポスターも上記HPよりダウンロードすることができます．



紹　介

地球全史：写真が語る46億年の奇跡

写真：白尾元理・解説：清川昌一

岩波書店　2012年１月26日発行　AB判
192ページ　定価4,400円（税別）
ISBN 978-4-00-006246-6

地学をたしなむ者・地学写真マニアのあこがれ白尾元理氏の作品のうち，選び抜かれた100枚が光る美しい本.「地球全史」のタイトル通り，ページを一枚一枚めくっていくことで，地球の誕生から東北地方太平洋沖地震までの時の流れ・出来事を，それらを刻み込んだ地形・地層・岩石というかたちで見せてくれる.

はたして，どのような指針でシャッターを切り続けたのだろうか，もしくは，どのような基準で，これら100枚を選んだのだろうか. 白尾氏による「はじめに」に，はっきりと撮影基準・選定基準が示されている．いわく「地質の写真で重要なことのひとつは，その地層の意義がわかるだけではだめで，一般の人でも魅力的と感じる露頭を探し出すことである．ひとつのテーマにそって何カ所もの露頭を巡り，ようやく最良の露頭に巡りあって１枚の写真をものにする」．まさに，これに尽きるのだろう．要するに，学術論文に載せるための露頭写真とは違うのだ．多くの写真にスケールが入っていないのは，学術と芸術のせめぎ合いの結果と考える.

白尾氏自身，すぐれた地質屋であるが，先カンブリア時代の撮影には，熟練のガイドが必要であったようだ．選ばれたのは，共著者となっている清川昌一氏．さて，近年増加しつつある日本の先カンブリア時代の専門家のなかから，なぜ清川氏が選ばれたのであろうか．やはり「はじめに」に，その人選に至る経緯がある．「そうやって撮影した10年間の写真を時代別に並べてみると，先カンブリア時代の写真がまったくないことに気づいた．この時代は40億年前から５億年前までに至る，地球の歴史の８割を占める重要な部分である．先カンブリア時代の写真がなければ地球全史を語ることにはならない．しばらくは途方にくれた．そこで思いついたのは，先カンブリア時代の地質研究を続けている九州大学の清川昌一さんである．清川さんは，今や日本では絶滅種ともいえる野外地質家である．ランドクルーザーに調査道具一式を積み込んで１カ月以上もテント生活を続け，研究成果をあげている」.

このように，白尾氏は地球史における８割を占める先カンブリア時代の写真を撮影するパートナーとして，「絶滅種」清川氏を選んだ．一緒に旅をするわけだから清川氏の人となりも考慮して選んだのだろう．当然，清川氏が一枚噛んだ時点で，物事がすんなりとは進まなくなることは，百も承知であったはずだ．清川氏による「あとがき」によれば，「撮影旅行は８回，車での移動距離は３万キロ以上」の長い長い共同作業である．現代版の弥次喜多珍道中．しかし，予想される困難よりも，全く予想できない二つの才能による化学反応の果実を優先させたわけだ．この本が「地球全史」を冠するに値する作品となり，大成功を収めたのは，その際の白尾氏の決断にあると言えよう．白尾氏は「この共同作業は，困難ではあったが，なかなか充実していた」とさらっと書いている．これが真の大人というものだ.

本書には，きら星のような写真群に続き，清川氏による全８章の「解説」が納められている．わずか40ページ，と思って読み始めたが，なかなか読み応えがある．最新の研究成果もふんだんに盛り込まれた力作だ．写真との対応が細かく示してあるので，ページをめくり，露頭の様子を確認しつつ，地球全史の概要が理解できる構成となっている.

さて，ここまで褒めてばかりきたが，いくつか修正点と希望を挙げておきたい．版を重ねる際，ぜひご考慮頂ければ思う.

まず，表紙の見開き部分の地質年表であるが，これに写真番号が打ってあると，なお使い出のある年表になるかと思う．また，裏表紙の見開き部分には，国境線が記された世界地図に写真番号が打ってあるが，これを簡潔な地質図にする，というのはどうだろう．さらに様々なことに考えを巡らせることができる地図になる気がする．もう一つ，「解説」はさらなる推敲が必要だろう.

以下は杞憂であるが，この本に納められた写真があまりにもすばらしいが故に，日本中で起こることをついつい心配してしまう．きっと多くの教員が，この本に掲載されている写真を，授業で使いたいと思うであろう．そして，地球科学の学生・研究者が，プレゼンのイントロ等でこれらの写真を使いたいと思うかもしれない．そうすると何が起こるか．皆スキャンを始める．日本全国で，膨大な時間が費やされる．また，見開きで一枚になっている写真も多数あるから，それをスキャンしようとして思いっきり開けば本も傷む．特に，図書館など公共施設に納められたものが傷んでいくのは，美しい本だけになおさら悲しい．今どきだから，スキャンしたものを，自分のブログ等にアップし始めるかもしれない．これも，構図から何から完璧を期した白尾氏・出版者にとっては，面白くないことであろう.

そこで提案だが，いっそのこと，本書のなかでも大きく取り上げられているポール・ホフマン氏を見習って（http://www.snowballearth.org/），プレゼンソフトで映しても問題ない程度に画像を軽くし，白尾氏の氏名がクレジットされた「教材用写真集」としてネット上で提供してはいかがだろう．それを本書の姉妹企画として出版社のホームページ上で公開する，という太っ腹企画だ．この企画が営業的にどのような結果をもたらすか正直私には分からない．ただ，電子書籍・電子教科書の流れが明確ななか，伝統的な紙による出版とネット上でのある種「相互乗り入れ」的な実験はいずれせねばならないであろう.その先鞭としてはいかがだろうか.

次に毛色が違う話となるが，やはり姉妹企画で，これらの露頭を巡る野外観察旅行を提案したい．現地で白尾氏から直接写真の手解き受け，かつ清川氏による地質学的な解説を満喫するという夢の企画．実は，清川氏の本当の武器はペンではない．彼の真価はお天道様の下でこそ発揮される．もし，巡検が実現すれば，本書に納められた解説よりも遥かに饒舌な，そして多彩な擬音語を駆使しつつ解説する清川氏を堪能することができるであろう．そんなことにまで想いが膨らんでしまうのは，本書の魅力のせいだ.

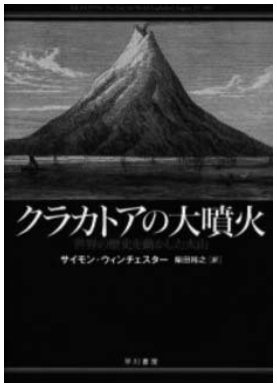
今回の出版，私個人としては，清川氏がこの本により「うちのお父さん，ほとんど家にいなくて，あちこち飛び回っているのはなんでぇ？」に対する答えを，学術論文より分かりやすいかたちで，ご家族の皆様，とくに娘さんたちに示されたことが何よりうれしい．それもお子さんたち自らが開くことができる美しい写真集として.

現在の日本に住む我々は，東日本大震災で，はからずも自然の猛威を目の当たりにした世代となってしまった．さらに，放射性物質による汚染で先行きは全く見えない．なかなか，前向きになれないというのが正直な気持ちだろう．本書によって，地球の美しさ・刻んできた時の流れを再確認し，地球はやはり捨てたものではない，と感ずるところから，また何かが始まるのかもしれない．混沌の時代，本書を世に出された両著者，出版社，そして貢献されたすべての方々に感謝の意を表したい.

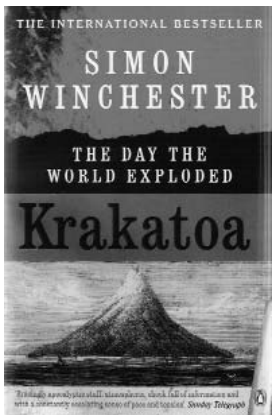
（茨大教育　**伊藤　孝**）

クラカトアの大噴火
世界の歴史を動かした火山

サイモン・ウィンチェスター著
柴田裕之訳



早川書房　2004年１月31日初版　157×217×37 mm，466ページ　2,800円（税別）
ISBN4-15-208542-6 C0025



原著
Simon Winchester
Krakatoa: The Day the World Exploded, August 27, 1883
Penguin, 2004（Viking, 2003）ISBN-13:978-0-141-00517-1
432p. 128×197×30 mm, 2,205円　税込（購入時の実費，変動あり）

この本は，19世紀以後の現代世界で最大の噴火の１つであるインドネシアのクラカトア火山1883年噴火（噴出量25 km^3，火山爆発指数VEI＝6.5；本書による）について，この噴火の推移とそれによる津波災害（死者36,000以上）を中心に，プレートテクトニクスに基づく地球科学的背景やこの火山の噴火史，生物学・生物地理学・気象学・大気物理学分野の関連現象，そしてこの噴火の社会的な背景・影響，歴史的意義を含めて，「人に焦点を当てて壮大なスケールで描いた」（早川書房の宣伝文）文理融合的な労作である．これは地質図の創始者ウィリアム・スミスを扱った同じ著者の「世界を変えた地図」（原書2001年，和訳は早川書房から本書より遅れて2004年７月に出版）の次作であり，2003年の出版（和訳は2004年１月）から８年も経過しているので，既に新聞，雑誌，ネットなどに火山の専門家や一般人が多数の書評や感想文（多くは好意的）を発表している．今さらの感もあるが，東日本大震災を経たこの時期に，もう一度この本を読み直し，我々の学問を見直す必要があるのではないかと考え，ここに紹介する．

本書の訳者は，あとがきの最後に，「日本に暮らす私たちにしてみれば，クラカトアの動きを待つまでもなく，地殻の活動の影響を体験する機会はいくらでもある．ただし，人的・物的被害はあくまで本書のような読み物の世界の中に収まっていてほしいものだ」という願いを述べている．しかし，本書の出版直後の2004年12月に，同じインドネシアを震源として，同国やインド洋周辺諸国で津波による死者計28万以上を出した海溝型のスマトラ大地震が発生し，2005年３月にもその南の隣接地域で死者1300以上の海溝型地震が，2006年５月にはジャワで死者5000以上の直下型地震が起きた．2008年５月には死者７万に近い中国の四川地震，2010年１月には，カリブ海のハイチで死者22万以上の直下型地震が発生した．そして，2011年３月に死者・行方不明者２万に達する東日本大震災が発生した．この間，イラン，パキスタン，チリ，トンガ，ニュージーランド，イタリア等の地震でも相当数の死者が出た．訳者の願いも空しく，本書が出てから現在までの８年間に，クラカトア大噴火による死者の15倍以上，60万人を超える人々が地殻の活動に起因する自然災害で死亡した．火山の噴火による死者は少なかったが，例えば2010年にアイスランドのエイヤフィヤトラ氷河火山が噴火し，その火山灰により欧州の航空網が１週間も麻痺する事態が発生した（鈴木雄治郎（2010），日本地質学会News, 13（５），10-12）．

現時点でこの本を読む１つの意味は，巨大噴火の実像を全体的に把握できる優れたドキュメントという点である．インドネシアのタンボラ火山噴火（1815年，100 km^3）など，クラカトアより大規模な歴史時代の巨大噴火は他にも知られているが，噴火や被害の様子が最も詳しく記録されているのは最新のクラカトアである．もし日本で巨大噴火が発生するとどうなるかについては，石黒耀の小説「死都日本」（講談社，2002年，2005年本学会表彰）によく描かれているが，実際には約7300年前の鬼界カルデラの噴火（噴出量>170 km^3）以後，日本で巨大噴火は起きていない．歴史時代に日本が経験した最大の火山噴火は朝鮮と中国の国境に位置する白頭山の噴火（平安時代，噴出量50 km^3）であり，その火山灰は東北地方から北海道にかけて５cm程度の厚さで堆積しているが，この噴火についての確実な歴史資料は日本，朝鮮，中国いずれの国にも残っていない（宮本ほか，2002；月刊地球号外39, 202-）．渤海国がこの巨大噴火で滅んだという議論があったが（町田洋，1992；火山噴火と渤海の衰亡，「謎の王国・渤海」，104-，角川選書），最近の目潟火山湖底堆積物の年縞の研究によると噴火発生は929年であり（川手ほか，2010；地質雑，116，349-），同国滅亡（926年）の直接の原因ではないらしい．しかし，亡国の混乱期に噴火が追い打ちをかけたことは間違いないだろう．

本書には時系列的に事項を並べた表がついていないので，噴火に伴うイベントがどのような順序で起こったのかを理解するには，ノートをとりながら読む必要がある．1883年の噴火は，まず５月10日の地震や空振で始まり，５月20日にクラカトア島の南峰（ラカタ）が噴火した．この噴火は翌日まで続いたが，被害はなく，22日には静かになった．６月24日に島の中部のダナンから噴火が再開し，７～８月にかけて噴火が続いたが，特に被害はなかった．しかし，８月26日（日）の午後になって，ジャワ島西岸の町に熱い軽石が降るようになり，大きな大砲を打つような音が聞こえ，夜には空振でガラスが割れるなどの被害が出るようになった．そして27日（月）になって大きな爆発が４回発生した（クラカトア時間で5:30，6:44，8:20，10:02）．このうち３回は地球全体で気圧の変化が観測され，４回目の最大の爆発の衝撃波は地球を７周回ったことが各地の気圧計に記録されている．最初の爆発で大きな津波が起き，6:15にスマトラ島のケティンバンが壊滅，ジャワ島のアンイェルもこの頃津波で壊滅した．津波は9:00にジャワ島北西端のメラックに達し，11:30にはジャワ島北岸中部のバタビア（現ジャカルタ）に達した．同市では12:36に最大津波が襲来し，この日の午後まで暗い灰に覆われ，泥の雨が降ったが，28日（火）の夜明けには全て止んだ．つまり，これほどの規模の噴火でも26日の午後から27日の午後まで，激しい活動は24時間程度であったことがわかる．これは過去や将来の巨大噴火を考える上で参考になる．

本書のもう一つの興味は，様々な学説や学者についての著者独自の見解である．この本では，大規模な地質区の意味や科学史的な時代背景を読者に理解させるために，まずアジアとオーストラリアの動物区の境界であるウォーレス線の話が出てくる．しかし，ウォーレスの進化論における大きな貢献を，同時代のダーウィンが正当に扱わなかった，という方向に話が進んでしまう．地質的な境界（プレート境界）とウォーレス線はどう見ても一致せず，ほぼ直交するのに，この不一致についての説明はなく，同じ沈み込み帯上

のバリ島とロンボク島の間の幅25 kmの海峡をウォーレス線が通る理由も説明がないのは残念である．一方，大陸移動説のウェーゲナーが同時代の学界からいかに憎まれていたか，その理由は何か，なぜ彼の学説が長く欧米の地質学界で無視されたかについては，よく説明されている．プレートテクトニクスの創始者の一人であるT. ウィルソンが，いつもポケットにトランスフォーム断層の模型を入れていて，誰にでも嬉々として実演したというようなエピソードが随所に散りばめられている．中でもオックスフォード大学の地質学科出身の著者自身の体験談は面白い．著者は学生時代，プレートテクトニクス創始者の一人であるH. H. ヘスの講演会の代表世話役をしたが，いろいろ不運が重なって大失敗をした話は非常に生き生きしており，ヘスの酒好きで人なつこい性格をよく伝えている．学生時代にグリーンランドで古地磁気試料採集のための探検旅行に手伝いとして参加した話にも，青年期の実体験に裏付けられた輝きがある．

本書の文系の話について私はあまり批評能力がないが，少しだけ指摘する．インドネシアにおけるイスラム教の原理主義化と独立運動がクラカトアの噴火を機に顕在化した，という本書第９章の話は，「イスラム教が根本的に帝国主義の宗教であることを忘れてはならない」，「インドネシアはアラビア人によって改宗させられ，今なお，アラビアやアラビア人に精神的な指標やよりどころを求めている」（訳書p.367）という基本認識が基調となっていて，2001年の米国東部9.11テロ事件や2002年のバリ島爆弾テロ事件（p.379）が続いていた本書執筆時の欧米の雰囲気を色濃く反映しているように思う．また，本書前半のオランダの東インド会社に関する記述を読むと，15世紀末の「教皇贈与」によって世界を半分ずつ与えられたスペインとポルトガルに遅れて，16世紀から植民地獲得競争に参入したオランダとイギリスの相互関係がよくわかる．1726年出版のスウィフトのガリバー旅行記にはオランダ人への悪口がずいぶん書かれているが，本書にも多少そういう気分がある．

さて，クラカトア島は1883年の噴火で一度消滅したが，1928年にアナック（子供）・クラカトア島が現れ，それ以後噴火を繰り返しながら，著者の計算では毎週５インチ（これを12.7 cmと訳すのは数学的には正しいが地学的には誤り）のスピードで現在も成長を続け，既に標高500 mを超える火山になっている．大噴火前のクラカトア島南峰の標高は約800 mだったので，それに近づいている．本書最終章には著者のクラカトア島訪問記がある．

本書の巻末には，「この本を書くために有益で面白かった本」が100冊リストアップされている．私の高校時代の恩師は，「本を１冊書くには，100冊は読まなければダメだ」と仰っていた．この著者はそれを実践しており，見習わなくてはならないと思う．推薦図書や映画の説明も，「推薦できない１本の映画」の批評を含めて大変面白い．

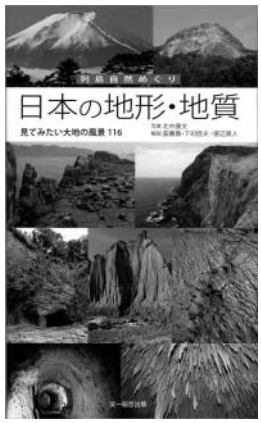
この本の日本語訳は非常によくできていて，専門用語の訳も正確である．しかし，原書の著者の勘違いによるいくつかの間違いがそのまま訳されている．訳書115頁の「ブリュンヌは更新世の終わり，今からおよそ１万年前に磁場の逆転があったことを示した」というのは，およそ70万年前の間違いである．これに関連して，原書では松山基範の名前がMotonariになっている．また，原書384頁（訳書425頁）の脚注に小笠原の海底火山「福徳岡の場」が出てくるが，Fukoto Kuokanabaになっている．訳書129頁の「海洋リソスフェアは薄く，厚さはおそらく６～７km」というのも原書の著者が海洋地殻と海洋リソスフェアを混同している．場所にもよるが，厚さ約100 kmが正しい．また，この頁の「その熱は今，引いている」という訳はわかりにくい．これは地球内部に蓄えられた集積熱と放射性同位体の崩壊熱が次第に減少していることを指す．

現時点で本書を読んで思うことは，10年後でも20年後でもよいから，日本人が世界に向けて，本書のように地球科学と人文学を縦横に編み上げた，しかし日本人独自の世界観に基づく，筋の通った一般向けの東日本大震災についてのドキュメントを書くとすれば，どのような内容になるだろうか，ということである．しかし，我々地質学研究者は文筆家ではないので，最近も世界で年平均数万人が犠牲になる地震，火山，津波などの「プレート災害」を少しでも減災するために真剣に研究を進め，世界と連携して行動していく必要がある．津波は現在の科学レベルでもその襲来の10分以上前（場合によっては数時間以上前）に予報できる災害であり，火山噴火も予報に成功して住民を避難させた例が日本にあり，地震も大きな揺れが到達する数秒前に予報するシステムが世界に先駆けて日本で機能している．希望を持って進もう．本文中の噴出量，死者数などは，特に断らない限り2012年版理科年表に基づく．

（**石渡　明**）

日本の地形・地質 見てみたい大地の風景116

写真：北中康文，解説：斎藤　眞・下司信夫・渡辺真人



（文一総合出版，2012年３月発行，18×11cm，287ページ，定価：2,200円（税別），ISBN 978-4829988008）

表題にある大地の写真＋解説集，見て・読んで・楽しい本が出版された．旅好きの方に必携の１冊であり，温泉巡りの旅にも携帯すると自然の美しさ・素晴らしさが道々理解でき，充実した旅となること請け合いである．また大地をこれから研究しようとする学生諸君を手引してくれる書でもある．本書は日本全国の天然記念物・世界遺産・ジオパーク・地質百選などから116カ所の美しい自然景観を選び，その場の地質現象やそれが持つ意味が解説される．解説地点は冒頭の日本地質図上にプロットされている．写真はそれぞれの地点で最適な時期を見て撮影されたものと思われ，非常にきれいで魅力的である．

本書は，まず「自然の風景を楽しむために」と題して，筆頭著者の斎藤　眞さんが本書出版の目的について述べ，観光地や温泉地など，何処にでもある地形や露頭に現れた地質現象が本書の解説などによって正しく理解され，内容を知ることによって自然現象を深く理解し・楽しむことを提案する．写真は全国からの116カ所550枚に及ぶが，それぞれが適切な時期に写真家，北中康文さんによって撮影されており，見事な出来栄えである．前書には「シャッターを切る前に」と題して，時間軸が重要な地質現象などの撮影を成功させる秘訣の解説がある．

本書は北海道地方から九州・沖縄まで８章に分けられている．北海道地方は，冒頭の知床五湖から見る紅葉に新雪を被る羅臼岳知床連峰の見開き写真に度肝を抜かれる．現世の

知床半島火山岩類の解説があり，ついで後期白亜紀の根室の水中玄武岩，車石の解説がある．次いで白滝黒曜石，北海道ならではの夕張石炭大露頭と幌満かんらん岩体，そして新冠泥火山・有珠山と昭和新山などの現世火山岩類である．

東北地方は，まず青森県の恐山の金鉱床，仏ヶ浦の中新世凝灰岩類の海食地形，五能線沿いの十二湖・日本キャニオンの凝灰岩の崩落地形，岩手県では陸中海岸北部と南部の海食地形が6頁にわたり，そして夏油温泉の石灰華も収録されている．秋田－山形県からは，目潟火山群のマール，鳥海山は4頁にわたり紹介された．山形－宮城県からは蔵王山，福島県の磐梯山などの著名な火山がそれぞれ2頁を費やして紹介された．福島県には他に鮮新世凝灰岩の浸食地形のきのこ岩，塔のへつりなどがある．

関東地方の茨城県からは中新世火砕岩が作る袋田の滝，出島のカキ礁：カキ殻は埋れないように比重が軽くカキ礁を作りやすい．栃木県からは塩原木の葉化石，安山岩で堰き止められた華厳の滝，建材で有名な大谷石．群馬県からは中新世凝灰岩の河食地形である吹割の滝，急崖を流れる常布の滝，草津白根山の湯釜，浅間山とその周辺．その他，埼玉県の秩父・長瀞，千葉県の犬吠埼と屏風ヶ浦，南関東ガス田，鮮新世の黒滝不整合，館山の海成段丘．東京都も1件あって，山の手崖線地形・武蔵野台地．神奈川県は三浦半島．

中部地方はまず新潟県の中新世の新津油田，糸魚川・静岡構造線，小滝ヒスイ峡，富山県では現世凝灰岩を削った称名滝，立山カルデラと大崩壊，石川県では百万貫岩と桑島化石壁，福井県の東尋坊海岸，山梨県の瑞牆山岩峰群，名峰冨士山には6頁割り当てられた．長野県大鹿村の中央構造線，氷河地形の木曽駒ヶ岳千畳敷，花崗岩の河食地形の寝覚ノ床，岐阜県の飛水峡，根尾谷断層，春日のスカルン鉱床，石灰岩の赤坂金生山，木曽三川と濃尾平野，愛知県は鳳来寺山が選択された．

近畿地方に入って滋賀県は伊吹山，三重県の二見浦の夫婦岩，熊野鬼ヶ城と獅子岩赤目四十八滝，京都府の天橋立，琴引浜，大阪府－奈良県の二上山，奈良県兜岩と鎧岳，屏風岩，和歌山県の一枚岩と虫喰岩，橋杭岩，さらし首層，滝の拝，瀞八丁など5件，兵庫県の六甲山，玄武洞，兵庫－鳥取県の山陰海岸など多数．

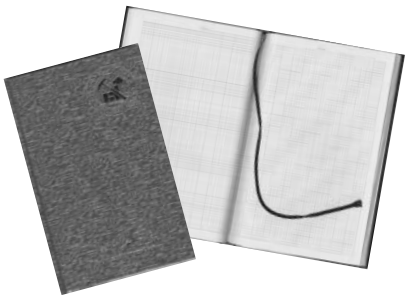
中国地方は鳥取砂丘，島根県の立久恵峡・石見銀山，岡山県は神庭の滝，広島県の帝釈峡の雄橋・久井の岩海・三段峡の竜門，山口県の高山と須佐湾，秋吉台，網代ノ鼻の赤色層，四国地方は香川県の屋島，徳島県の阿波の土柱，四国の中央構造線，土釜，大歩危・小歩危，宍喰浦の化石漣痕，愛媛県に入って別子銅山，砥部衝上断層，面河渓，四国カルスト，高知県の室戸岬，竜串海岸など．

九州地方では福岡県の平尾台，芥屋の大門，佐賀県は七ッ釜，長崎県の雲仙平成新山，熊本県は阿蘇カルデラ，立神峡，球泉洞と槍倒，天草御所浦，大分県の耶馬渓，八丁原地熱発電所，宮崎県高千穂峡，青島・鬼の洗濯岩，猪崎鼻フルートキャスト，関之尾滝，鹿児島県は霧島火山群，曽木の滝，桜島と姶良カルデラ，開聞岳，種子島の砂鉄，屋久島，沖縄県は石灰岩の海食崖である万座毛，槍穂の様に鍾乳石が垂れ下がる玉泉洞が取り上げられている．

末尾には日本の主要な地質史が纏められ，また火成岩・堆積岩・変成岩の分類が示され，また本書で使われた用語の解説も行われているので，一般利用者に非常に便利な配慮がなされている．

解説者はかつて（1992年），天然記念物特集を地質ニュース453，454号で企画し地学の普及に努めたが，今回はより広範囲に数多くの地質現象が取り上げられており，読者の地形・地質に対する理解がより深まるものと期待される．一般有識者や学生諸君に是非一読をお勧めしたい．（**石原舜**三）

学会オリジナルフィールドノート 好評発売中です！！



皆様からご好評いただいております，学会オリジナルフィールドノートが新しくなりました．

表紙がビニールコーティングになり，今までよりもさらに水や摩擦・衝撃にも強くなりました．野外調査に最適です．本体の紙は従来と同じく雨に濡れても丈夫なレインガード紙を使用しています．ぜひご活用ください．

サイズ：12×19cm（従来と同じです）．　カバー：ハードカバー，ビニールコーティング，金箔押し．
色：ラセットブラウン（小豆色）　会員頒価：500円
ご希望の方は学会事務局まで＜main@geosociety.jp＞

TOPIC

新潟大学・糸魚川市合同調査および普及活動

（糸魚川市フォッサマグナミュージアム/新潟大学自然科学研究科　**茨木洋介**）
（新潟大学理学部地質科学科　**松岡　篤**）

2011年５月２日（月）～５月５日（木），新潟大学と糸魚川市による合同調査および普及活動が糸魚川市で行なわれた．この行事は，日本初の世界ジオパークである糸魚川ジオパークと新潟大学の連携をより一層深めることと，参加する学生の地質調査技術の向上を主な目的として計画された．糸魚川から恐竜化石を発見することを，この合同調査の目標のひとつとしている．行事の概要と実施内容について報告する．

はじめに（経緯と概要）

新潟大学は，糸魚川ジオパークの取り組みに対し，世界ジオパーク認定以前から様々な協力を行なってきた．2010年５月に，新潟大学と糸魚川市が糸魚川市内で最初の合同調査を実施した．内容は，糸魚川市市振の境川右岸に露出する地層の野外調査と，子どもを対象とした普及行事の開催であった．調査はまだ継続しており，普及活動は継続により効果が増大することが期待されるため，2011年も合同調査を実施することとなった．

５月２日は昨年調査を行なった境川右岸の見直し，３日は長野県小谷村で巡検，４日は再び境川右岸の調査，５日は普及活動を行なった．新潟大学の参加者は新潟大学の教員１名，学生２名，院生５名（社会人学生を含む）の計８名であり，他に糸魚川市および新潟県内外の化石愛好家９名が調査と巡検に参加した．

５月２日　境川右岸の露頭調査

新潟大学からの参加者は，宿泊場所である青海中学校セミナーハウスに集合し，今日の調査地である糸魚川市市振の境川右岸へ向かった．現地で県内外の化石愛好家と待ち合わせ，調査開始前に顔合わせ（自己紹介）を行ない，調査方針について打ち合わせを行なった後，調査を開始した（写真１）．

新潟大学の参加者は，昨年調査した露頭の再確認を行なった．昨年の調査ではルートごとに別の人が記載したため，層の区分のしかた，記載項目，描写のしかた等をすり合わせる作業をした．

化石愛好家のかたがたは，それぞれ化石が見つかりそうなところに目星を付けて化石探しを行なった．11時過ぎに，調査地近くの小学校の先生と児童３名が，ふるさと学習のために偶然調査地を訪れ，引率の先生が参加者と情報交換をした．昼食の前に化石愛好家の１人が二枚貝の化石を発見した．

16時頃調査を終了し，化石愛好家の方々と別れて，セミナーハウスへ戻った．市内の中華料理店で，糸魚川で売り出し中の「ブラック焼きそば」他を食べた後，セミナーハウスで学習会（この日の調査のまとめと，明日の予定についての打ち合わせ）を行なった．

５月３日　小谷村巡検

参加者は市内の大型スーパーの駐車場で待ち合わせ，長野県小谷村へ向かった．まず小谷村郷土資料館へ行き，小谷村の来馬層群から発見された恐竜の足跡化石，首長竜の歯の化石などを見学した．

資料館を出て，小谷村来馬の化石産地へ向かい，これまでに化石が産出した実績のある露頭でしばらく化石採集を行なった．次の化石産地に移動してから昼食をとり，化石採集を行なった．その後移動し，川の対岸の化石産地を遠望し，今日の巡検を終えた．

夕食は市内の和食レストランで，糸魚川で売り出し中の「ブラック焼きそば」などを食べた（ブラック焼きそばは店舗により調理方法が異なる）．その後セミナーハウスへ戻り学習会を行なった．

写真１　境川右岸での調査風景．

写真２　合同調査参加者の集合写真．

５月４日　境川右岸の露頭調査

セミナーハウスに集合し，今回の合同調査の参加者全員で記念撮影を行なった（写真２）．それから市振の境川右岸の露頭へ移動し，調査を開始した．この日の調査は，結果を論文としてまとめるための最終的な現地調査であった．数名の化石愛好家が生痕化石を発見し採集した．

16時過ぎに調査を終了し，夏に実施する化石採集の雨天時の代替実施地を下見して，セミナーハウスへ戻った．この日で大学へ戻る参加者がいるため，まず学習会を行ない，その後，居酒屋で夕食をとった．この日もブラック焼きそばを食べた参加者が多かった．

５月５日　普及活動

この日は，午前は市役所周辺で開催される「こども大会」に合わせて，こども大会会場の１つである亀ヶ

岡体育館で普及活動（化石のレプリカづくり，古生物ぬり絵，化石スケッチ）を行なった（写真３）．

９時過ぎに会場の亀ヶ岡体育館へ行き，道具の搬入，会場の設営を行なった．レプリカづくりの雌型として用意したのは，アンモナイト，二枚貝，恐竜の爪など7種類，レプリカの材料は８色用意して参加者が好きなものを選べるようにした．10時から開始し，開始から30分ほどの間はそれほど混雑しなかったが，10：30以降，化石のレプリカづくりの参加待ちの行列は最後まで途切れることがなかった．参加者は皆熱心に説明を聞き，材料の色を真剣に選び，一生懸命化石の型に材料を押しつけていた．１人で何個もレプリカをつくった参加者もいた．ぬり絵コーナーも開始当初は空いていたが，10：30以降は常に参加者がおり，参加者は皆真剣に取り組んでいた．仕上がったぬり絵は壁に張り出された．化石のスケッチの参加者はいなかったが，置いてある化石が糸魚川で見つかった実物であることを紹介すると，興味深そうに眺め，触ったり手で持ったりしていた．化石のレプリカ作りの参加者は延べ156人であった．

写真３　化石のレプリカづくり．

写真４　化石のスケッチ教室．

午後は，フォッサマグナミュージアムに移動して，事前に申し込みをした子どもたち（10名）を対象に，化石のスケッチ教室を開催した（写真４）．まず本教室の講師を松岡が務め，化石についての解説ののち，うまくスケッチするコツについて説明した．子どもたちだけでなく，送迎に来ていた保護者５名もスケッチに参加した．スケッチを終えた参加者は，化石についての質問を余白に書いた．30分ほどで全員がスケッチを終えた．

スケッチ終了後，参加者に，自分が考えた質問を挙手して発言してもらい，新潟大学の学生・院生が答えた．質問の内容は，「自分がスケッチした化石がどの時代にできたものなのか」が最も多く，他に「化石は何種類あるのか」，「化石はどうやってできたのか」，などがあった．最後にスケッチの参加者全員で記念撮影を行い，2011年度の普及活動は終了した．

合同調査および普及活動の成果と今後の展望

2010年の合同調査の成果として，水上谷層のチャート礫から中生代の放散虫が得られ，水上谷層が手取層群の赤岩亜層群に対比される可能性が高いことがわかった．その成果は，2010年９月に開催された日本地質学会第117年学術大会（富山大会）にて口頭発表された．この成果と，調査地域の地質について，現在，糸魚川市博物館研究報告に掲載すべく原稿が執筆されている．

また，未公表ではあるが，今回の調査で水上谷層から二枚貝化石が得られた．これは，これまで植物化石しか見つかっていなかった新潟県内の手取層群から初めて発見された微化石以外の動物化石として貴重なものである．先述したように，この合同調査には，糸魚川ジオパークから恐竜を発見するという大きな目標がある．地質のデパートを自称するほど多様な地質を持ちながら，恐竜だけは糸魚川から発見されていない．多くの人に訪れていただくためにも，恐竜の発見はぜひ達成したい目標であり，二枚貝化石の発見はそのための小さな，しかし確実な前進であると考える．

今回の合同調査には４年生が２名参加した．新潟大学での３年生までの実習では，中古生界の硬い岩石を扱う機会は限られている．卒業研究ではじめて中古生界の岩石を扱うことになると，岩相区分から戸惑うことになる．この合同調査は，そのような４年生が中古生界の岩石に慣れるよい機会となる．今回の合同調査では糸魚川に隣接する長野県小谷村をフィールドとする４年生がいたこともあり，教育の面でも効果的である．

普及活動については，化石のレプリカづくりは昨年以上に多くの参加者があった（昨年は延べ約80人）．化石のスケッチ教室については，小学校に事前に参加募集の告知をしてあったが，参加者は10名であった．参加者が少ない原因は，実施日が大型連休の最終日であることが考えられるが，その日程でも集まる参加者に，化石に触れる機会を提供することは有意義であると考える．より多くの子どもたちに化石・地質に興味を持ってもらえるよう，今後も引き続き普及活動を続けていきたい．

この合同調査は，大学とジオパークを推進する地域の連携という枠組みで行なわれており，地質の専門家が少ない（あるいはいない）ジオパーク推進地域でも，大学との連携により，ジオパークの基礎となる地質の専門知識に裏打ちされた活動ができる実例である．本稿がジオパークを推進する地域にとって少しでも参考になれば幸いである．2012年５月には，３回目となる新潟大学・糸魚川市の合同調査を予定している．

TOPIC　世界のＭ９地震と地質学の課題

（東北大学東北アジア研究センター　**石渡　明**）

マグニチュード（M）9.1（ここでは国立天文台（2011）に基づくモーメント・マグニチュード（Mw）を用いる）の2011年東北地方太平洋沖地震とそれに伴う津波および原子力発電所の事故による東日本大震災が発生してから１年になる．体に感じる余震はまだ頻発しているが，ここ数ヶ月間は被害を伴う地震の発生はない．今後の地震災害について考えるために，地球上で過去にＭ９クラスの超巨大地震が発生した地域における，その前後の地震活動の推移を知ることが大切だと思い，それらの地域における最近の大地震の時空分布を簡単にまとめてみた（図１，２）．そして，我々地質研究者の当面の課題について考えてみたい．

世界で観測史上最大の地震の規模はM9.5だったので，ここではM8.6～9.5をＭ９クラスの超巨大地震，M7.6～8.5をＭ８クラスの巨大地震，M6.6～M7.5をＭ７クラスの大地震と呼ぶことにする．M値が１つ大きいと地震のエネルギーは32倍，２つ大きいと1000倍になる．これは，同じ規模の地震がもう１度起きるとM値0.2の増加に相当し，10回起きると0.7，32回起きると1.0の増加に相当するということである．Ｍ９地震のエネルギーは約10^{18}Jになり，これは長崎型原子爆弾約１万発分，大型水素爆弾約10発分の爆発エネルギーに相当する．また，海洋プレートが沈み込む海溝とそこから内陸側のマントルへ斜めに下がっていく断層面またはその近くで起きる地震を海溝型地震，沈み込み帯上の島弧や大陸縁の地殻の浅部で起きる地震を（内陸）直下型地震と呼ぶことにする．直下型地震の場合はM6.5以下の中小規模の地震でも大きな人的被害を生じることがある．

まず，日本付近の地震の起こり方の特徴を最近20年間について見ると，1995年前後と2005年前後に千島～北海道～三陸北部沖の海溝沿いでＭ８クラスの巨大地震が頻発し，同じ時期に1995年の兵庫県南部地震や2004年の中越地震など内陸直下型地震も頻発したので，２回の地震活動のピークがあったように見える（図２a）．特に2005年の三陸南部沖M7.2地震が発生した前後に，宮城県と岩手県で直下型地震が頻発し，中でも2008年の岩手・宮城内陸地震は規模と被害が大きかった．そして2005年の地震とほぼ同じ場所で，2011年３月９日にM7.4の地震が発生し，ついに11日のM9.1超巨大地震に至った．また，同日中にさらに南の茨城県沖で最大余震（M7.9）が発生した．このように，最近20年間に千島海溝～日本海溝沿いでＭ８クラスの巨大地震が多数発生しており，2011年３月11日の超巨大地震はこの海溝型地震の活動域の南端で発生したことがわかる（図１a）．一方，日本の内陸各地だけでなく，日本海東縁地震帯の北海道南西沖（1993年）やサハリン（1995年），そして南方の台湾（1986，1999年）や西方の中国（1997，2001，2008年）でもこの20年間に大地震が頻発したが，関東・東海・紀伊・四国南部・九州南部・琉球などの南海トラフ沿いの長大な地域で直下型大地震も海溝型大地震も起きていないことが注目される（図１a）．

さて，世界では過去80年の間にＭ９クラスの超巨大地震が日本の東北地方，インドネシアのスマトラ，ロシアのカムチャッカ，米国のアリューシャンとアラスカ，そして南米チリの６つの地域で８回起き，平均して10年に１回ずつ起きてきたことになる．

スマトラ島周辺の最近20年間の地震の起き方を見ると，2004年末のM9.0（一説によるとM9.3）の超巨大地震以後，スマト

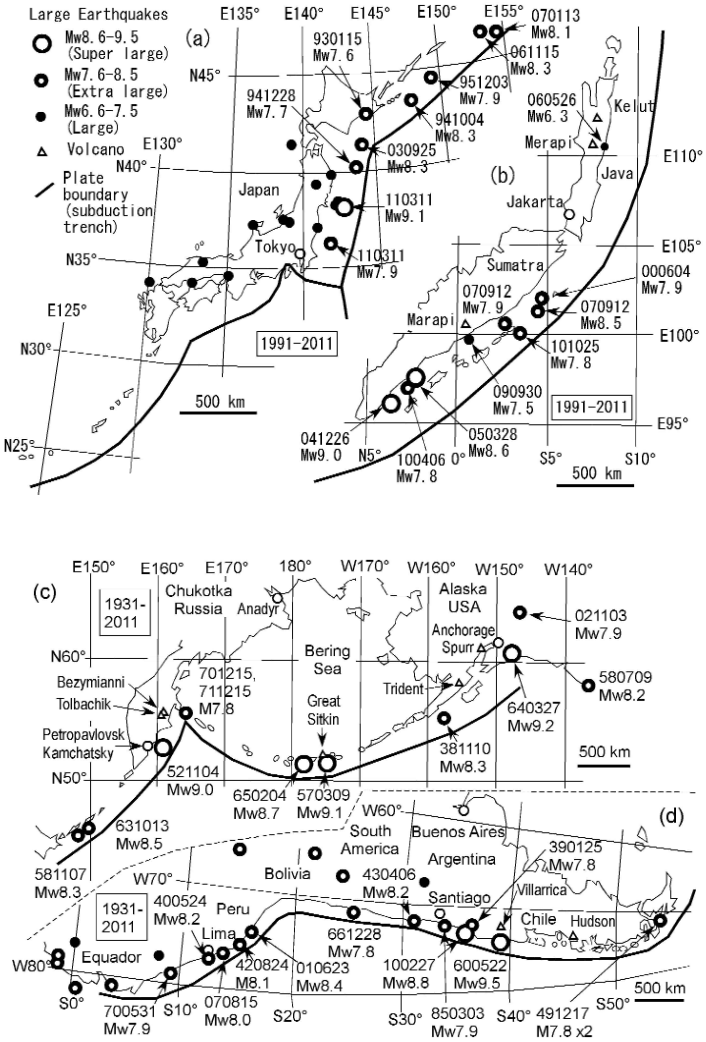


図１　日本（a），スマトラ（b），カムチャッカ・アリューシャン・アラスカ（c），南米太平洋岸（d）の最近の大地震の震源位置，発生年月日と地震の規模．期間は（a），（b）が最近20年，（c），（d）が最近80年．M7.8以上または地震・津波の死者数が1000人以上の地震のみを示した．ただし（a）についてはＭ７クラスの直下型地震も位置のみ示した．（d）ではチリとその周辺の地震のみ年月日などを示した．どの図も沈み込む海洋プレートが右下または下側に，大陸側が左上または上側になるように配置し，プレートの沈み込み境界（海溝）を太線で示した．また，本文中で触れた超巨大地震と関連して噴火したと思われる火山も示した．データは国立天文台編（2011）に基づく．

ラ島のインド洋岸沿いに平均年１回のペースでＭ８クラスの巨大地震が起きており，それ以前の大地震は，2000年にスマトラ島南部沖で1回あっただけである（図２b）．2004年以後のＭ８クラスの巨大地震は，この2000年と2004年の両震源の間の地域で発生している（図１b）．2004年の地震の震源断層（余震域）はスマトラ北端沖の震源から北へ1200kmのアンダマン諸島まで達するが，スマトラ中・南部沖は余震域に含まれず，その後の一連の巨大地震は2004年地震の余震ではない．特に2005年３月に起きた地震（M8.6）は超巨大地震に匹敵し，2007年の地震もM8.5と大きかった．東北～北海道沖では，一連の巨大地震の頻発後に超巨大地震が起きたが，スマトラではまず超巨大地震が起き，その後に巨大地震が頻発しているという違いがある．しかし，1000km程度の範囲で超巨大地震に伴って巨大地震が頻発するという点は共通している．また，Ｍ７クラス以下の内陸直下型地震も起きているが，発生頻度は日本より少ないようである．この20年間で最も大きな被害が出た直下型地震は2006年にジャワ島中南部のジョグジャカルタ附近で死者5700人以上を出したM6.3の地震である（図１b）．

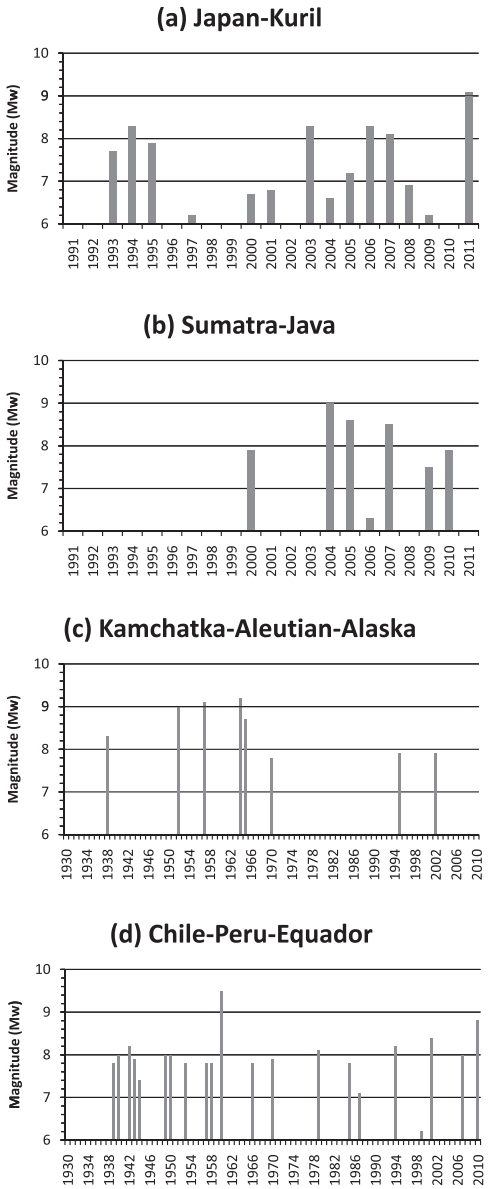


図２　日本（a），スマトラ（b），カムチャッカ・アリューシャン・アラスカ（c），南米太平洋岸（d）の最近の大地震発生の時系列．期間やデータは図１と同じ．ただし，（c）は千島地域の地震を除く．

カムチャッカ・アリューシャン・アラスカ地域は比較的地震が少ないが，Ｍ９クラスの超巨大地震は最も多く，最近80年間に４回起きている（図２c）．1952年にカムチャッカ沖でM9.0，1957年にアリューシャン列島中部でM9.1，そして1964年にアラスカでM9.2と，西から東へＭ９クラスの超巨大地震が５～７年間隔で起き，更に翌1965年には再び列島中部でM8.7の超巨大地震が発生し，その震源は1957年の震源と200km程度しか離れていない（図１c）．1964年アラスカ地震では，地殻変動により海岸沿いの広範囲の陸地が20mほど海側へ移動し（2011年の東北地震では５m），アンカレッジでは地滑りで市街が海側へ移動した（力武，1996）．1958年に発生したアラスカのリツヤ湾地震では，湾奥で発生した地滑りが海になだれ込み，最大波高527mという世界の歴史上最大の津波が発生した（同書）．そして，この時期の1958年と1963年に千島列島南部沖でも相次いでＭ８クラスの巨大地震が発生した．カムチャッカ・アリューシャン・アラスカ地域では，日本やインドネシアのようにＭ９地震の前または後に，隣接地域でＭ８クラスの巨大地震が毎年のように頻発するということはなかったが，アリューシャン列島中部でＭ９クラスの超巨大地震が1957年と1965年に８年の間をおいて繰り返し起きたことは注目に値する．

南米のチリからペルーを経てエクアドル・コロンビアに至る太平洋岸沿いも，日本やインドネシアに比べると地震の発生頻度は低いが，この沿岸全域でＭ８クラスの巨大地震が発生しており，内陸直下型大地震もある程度発生する（図１d）．M9.5という観測史上世界最大の超巨大地震が1960年にチリ中部沖で発生し，その津波により日本でも大きな被害が出た（日本での最大波高６m）．そして，その50年後の2010年に約400km北方でM8.8の超巨大地震が発生した（図１d）．この地震の津波も日本に来たが，１m程度の波高だった．これは東北沿岸の住民の津波に対する警戒心を弱める逆効果をもたらし，結果的に東日本大震災の被害を拡大させた．これらは南米の太平洋沿岸で最近80年間に発生した地震のうち最大の２つである．1960年のM9.5の超巨大地震の前と後を比べると，前の方がＭ８クラスの巨大地震の発生頻度がやや高かったようであるが，2010年の超巨大地震の前に巨大地震の発生頻度が高くなったようには見えない（図２d）．

以上のような世界各地の超巨大地震の起き方を比較すると，次のようなことが言える．

１．Ｍ９クラスの超巨大地震がもう一度来ることはあるか

超巨大地震が500km以内の地域で続けて起きることは，上述の６つの地域（東北日本，スマトラ，カムチャッカ，アリューシャン，アラスカ，チリ）のうち３地域で発生した．スマトラでは３ヶ月後（と３年後），アリューシャンでは８年後，チリ中部では50年後に次の超巨大地震が来た．東北日本は地震発生後の年数が不足のため事例から除外すると，５地域のうち３地域で50年以内に次の超巨大地震が来たことになる．事例が少ないとはいえ，東北日本でもその可能性があると思った方がよい．

２．Ｍ８クラスの巨大地震が今後頻発することはあるか

インドネシアでは，2004年にM9.0の超巨大地震が発生して以後，その震源の南に隣接する地域でＭ８クラスの巨大地震が年１回程度の割合で発生し続けているが，東北～北海道沖ではこれと逆に，巨大地震が相次いで発生していた地域の南端で超巨大地震が発生した．そして，他の４地域では超巨大地震の前後に隣接地域で巨大地震が頻発するということはなかった．今後もＭ８クラスの巨大地震が東北～北海道沖で引き続き頻発するか，これで収束するかは判断できないが，もともと日本の地震活動は世界で最も活発なことを念頭に置く必要がある．巨大地震の震源が南方に広がる傾向があり（図１a），今後は伊豆諸島

沖や関東～九州～琉球にかけての海溝沿いでも巨大地震が発生する可能性がある．

3．M7クラスの内陸直下型大地震が今後頻発することはあるか

日本では2000年以後M７クラスの直下型大地震が毎年のように発生している．特に中央～西南日本では，海溝型の巨大地震が発生する前後には内陸直下型地震の発生頻度も高くなることが過去数100年間の歴史資料により明らかになっている（尾池, 1997）．1944年の東南海地震（M7.9）と1946年の南海地震（M8.0）以後，1948年の福井地震から1995年の阪神大震災までの約50年間は比較的地震の発生が少なく，日本はこの間に高度経済成長を遂げた．しかし2000年以後の地震頻発傾向は，今後数10年間続くと考えた方がよい．

以上のような今後の地震活動についての見通しを確認した上で，地質学者が現時点で緊急に研究すべき２つの課題について論じる．

第１は火山活動である．1703年12月31日の元禄関東地震（M８級），1707年10月28日の宝永東海・東南海地震（M8.6）に続いて1707年12月16日に富士山が噴火し，江戸にも火山灰が降ったことがよく知られている．しかし，1854年の安政東海・南海地震，1855年の江戸地震や1923年関東地震，1944年東南海地震，1946年南海地震などでは富士山の噴火はなかった．インドネシアでは2004年12月の超巨大地震の後，2005年４月にメラピ火山が噴火したことが知られているが，地震はスマトラ島北端が震源で，メラピ山はジャワ島東部にあり，両者は2000km以上離れている．ジャワ島東部では2007年10月以後ケルート火山も噴火を続けている．スマトラ島ではマラピ火山などが噴火を続けているが，地震に伴う大噴火はなかった．カムチャッカでは1952年の超巨大地震の震源の北方にあるベズイミアニ火山が1956年に有史以来初噴火し，山頂部が大爆発して標高が185m低下した．1975-76年には隣のトルバチク火山でも最大級の噴火があった．アリューシャンでは1957年の超巨大地震の7年前の1950年にグレートシトキン島が大噴火した．アラスカでも1964年の超巨大地震の11年前の1953年にスパー火山が有史以来初の大噴火を起こし，噴煙の高さが23kmに達した．トライデント火山も1953年と1962-63年に大噴火した．チリでは1960年の超巨大地震の後，1964年に震源近くのヴィジャリカ火山が噴火し，死者22人を出した．この火山は1971-72年にも噴火し，南方のハドソン火山も1971年と1991年に噴火した．要するに，超巨大地震の震源から数100km以内の地域でその前後10年程度の期間に火山が大噴火を起こす例はカムチャッカ，アリューシャン，アラスカ，チリ等でも見られた．東北地方では，貞観（869），慶長（1611），明治（1896），昭和（1933）などの津波地震の前後に噴火した火山は鳥海山（871），磐梯山（1888），吾妻山（1893），安達太良山（1899）があり，秋田焼山，秋田駒ケ岳，栗駒山，蔵王山，日光白根山などでも小規模噴火があったようだ．特に磐梯山の噴火は山体崩壊を伴い，死者461人を出すなど大きな被害があった．東北地方ではカルデラ火山の火砕流を伴う噴火は十和田の915年噴火以後ないが，その可能性も視野に入れる必要がある．

第２は地滑りである．アラスカのリツヤ湾地震を筆頭として，地震が地滑りを誘発し，それによって大きな被害が出ることがある．しかも，地滑りは地震時に発生するとは限らず，しばらく経過してから発生することも多い．1964年６月16日の新潟地震の震源に近く，大きな地殻変動が起きた新潟県北部沖の粟島では，その10年後の1974年３月22日に大規模な地滑りが発生し，粟島浦村中心部の港湾施設や総合庁舎，保育園などを載せた海岸部の土地が長さ480m幅60mにわたって海中へ消え去った（加藤，1981）．このような地滑りが湾内で発生すると，リツヤ湾のように局地的な大津波を引き起こす可能性がある．斜面の高さと傾斜，地層や断層の走向傾斜などから，危険な場所はある程度予測可能なはずである．あれだけの揺れと地殻変動に襲われた地域なので，近々東北地方太平洋岸のどこかで大規模な地滑りが発生すると思って準備した方がよい．地滑りは地割れ，地鳴りなどの前兆現象を伴うことが多いので，注意していれば事前に避難することも可能である．津波を生じる地滑りは火山噴火や火山体の崩壊でも発生し，日本では雲仙火山の眉山崩壊とそれによる津波（1792年，島原大変肥後迷惑）で大きな被害が出たが，これはM6.4の地震がきっかけだったという説もある．大規模工事が地滑りを誘発することもあり，1979年のフランス・ニース海上空港の建設に伴う崩壊と津波の例が知られている．海底地滑りが津波を引き起こすこともあるが，これは事前の調査や予測が不可能である．まず陸上の危険個所を洗い出し，適切な周知活動を起こすことが必要だと思う．

その他，活断層や津波堆積物の調査，震源域の海底掘削と掘削試料の解析，原発事故後の放射性物質の処理，液状化危険度の評価，復興計画への参画，被災博物館などの貴重な標本の修復，災害の記録と検証，防災教育など，地質研究者が貢献できる領域は広い．会員諸氏のご活躍を期待する．また，昨年の超巨大地震を「1000年に１度」などと言うが，それは東北日本に限った話であって，上述のように地球上では10年に１回程度発生する現象である．世界に学び，我々の経験を世界で役立てていかねばならない．それについて気になるのは，まだ世界共通の震度階がないことである．０～７の震度階を使っているのは日本だけで，最近は強とか弱とか複雑化している．実際，地震の際に外国人との意思疎通に不便を感じた．これを機に一般人にわかりやすく使いやすい，例えば０から９まで10段階の世界共通の震度階を作ったらよいと思う．

１年後の現時点で，改めて東日本大震災の犠牲者に哀悼の意を表するとともに，地震，津波，原子力発電所事故など震災関連の被害を受けられた方々に心からお見舞い申し上げる．

拙稿を校閲して貴重な改善意見をいただいた宮下純夫氏，久田健一郎氏およびサイモン・ウォリス氏に感謝する．

文　献

加藤碩一（1981）粟島地域の地質．地域地質研究報告５万分の１図幅，秋田6-81．地質調査所．32p.
国立天文台編（2011）理科年表，平成24年版．丸善．1108p.
尾池和夫（1997）日本列島の地震とその観測体制．日本学術会議編「明日の震災にどう備えるか」日学双書27, 17-34.
力武常次監修（1996）近代世界の災害．国会資料編纂会．415p.

追記１：この原稿は2012年３月11日に投稿したが，その後14日21:05に千葉県東方沖でM6.1の地震が発生し，茨城県や千葉県の一部で震度５強を観測，死者１名，負傷者１名，塀の倒壊，地盤の液状化などの被害があった．（2012年４月２日）

追記２：新聞・テレビなどの報道によると，日本時間2012年４月11日午後17:40（現地時間15:40）頃，インドネシアのスマトラ島北部西方沖のインド洋底を震源とするM8.6の超巨大地震があった．約２時間後にM8.2の余震があり，その後も余震が続いている．この地震は沈み込むインド洋プレート内部で横ずれ成分の大きい断層が動いたものとされ，津波は高いところでも１～３mだった．本文で述べたように，2004年末のM９地震以来，スマトラ島周辺では大地震が毎年のように発生しており，今回もそれらの１つと考えられる．アリューシャンやチリでもM９地震から50年以内に，約500km以内の地域で次のM９地震が発生しており，関東・東北・北海道地域でも警戒が必要である．（2012年４月11日）

第3回 惑星地球フォトコンテスト審査結果

最近10年間でジオフォトと呼ばれる写真分野は確立し，雑誌，書籍，ウェブサイトで優れた作品が頻繁に発表されるようになりました．ジオフォトが，一般の人々にも地質が身近に感じさせることに大きな役割を果たしているのは喜ばしいことです．

惑星地球フォトコンテストは今年で3回目を迎えました．作品の応募総数は1回目，2回目がそれぞれ436点，426点だったのに対して今回は321点とやや少なく，選考会で溜息が漏れるような作品が少なかったのは残念でした．

応募作品の中で注目されたのは地質研究者の清川昌一氏の作品で，最優秀賞と入選となっています．いずれも簡単には行けない場所での撮影で，何を見せたいかを客観的に判断してすばらしい作品に仕上げています．いまや日本の地質研究者は世界をまたにかけて調査する時代ですから，ぜひ自分の研究分野の自信作を応募してほしいものです．

また少し残念に思ったのは，デジタルカメラの進歩によって撮影対象や表現方法は大きく広がったのに，応募作品にはそれが生かされていません．見なれた露頭でも冒険的なアングルから撮影するとか，画像処理によっていままで見えなかった地質現象を表現するとか，ジオフォトの可能性を広げる作品を見たいものです．

講評：白尾元理

優秀賞：「自然の威力」　永友　武治［一般］

撮影場所：韓国岳山頂

講評：2011年1月27日に霧島連峰の主峰，韓国岳の登山中に隣接する新燃岳の噴火に出くわし，それを的確に捉えた写真です．モクモクと上昇する灰色の噴煙，放物線を描いて飛び散る火山弾など噴火の凄まじさがよくわかります．今回の新燃岳噴火では，夜の写真には秀作が多いのですが，この作品は昼の写真としては第一級のものです．

優秀賞：「ある惑星にて」
公文　俊朗［一般］

撮影場所：高知県　室戸岬
講評：曇天の日にこのような写真を撮影すると，空の部分が露出オーバーになりますが，作者はハーフNDフィルターを使って空の部分の減光しているものと思います．モノクロ的な色彩と変形した砂泥互層のフォルムがよく調和し，非日常的な力強い作品となっています．

優秀賞：「新燃岳の噴火と火山雷」
中馬　辰紀［一般］

撮影場所：宮崎県西諸県郡高原町大字広原4965-1
講評：この作品は，新燃岳の東北東7kmの広野から撮影したものです．撮影したのは27日早朝です．この頃が噴火のピークで，火山灰同士の摩擦によって発生する雷，火山雷を見事に捕らえています．翌日からはこのような火山雷はほとんど見られなくなってしまいました．

入選：「27億年前の海台１（枕状溶岩）」
清川　昌一［一般］

撮影場所：ジンバブエ　南部　Ngezi 川沿い
講評：この作品も最優秀賞を受賞された清川昌一氏によるもので，コマチアイトの枕状溶岩を撮影したものです．コマチアイトは太古代のみに見られる低粘性の高温の溶岩流ですが，その枕状溶岩を見るのは初めてでびっくりしました．上端が窮屈なので、空をもう少し入れたほうがよかった．

入選：「地球の記憶」　柳瀬　真［一般］

撮影場所：新潟県佐渡市江積
講評：佐渡島南西部の小木は，中新世の海底火山活動の堆積物が豊富に見られる地域です．特に有名なのが写真のような枕状溶岩です．この作品は，海岸沿いの道路のすぐ近くにある露頭を撮影したものです．説明的な写真としては成功していますが，もう一ひねりほしいところです．

入選：「チョコレート・ボンボン」
吉田　宏［一般］

撮影場所：フィリピン・ボホール島
講評：撮影地のボホール島は，セブ島の隣に東京都の２倍の面積をもつ島で，ダイビングの名所だそうです．チョコレート・ヒルは石灰岩の侵食でできた地形ですが，同じ石灰岩でも元々の構造や侵食のされ方によって桂林（中国）のようになったり，ツィンギ（マダガスカル）のような尖塔群になる場合もあり，興味深いものです．

入選：「渓谷を行くＳＬ」
竹内　久俊［一般］

撮影場所：スイス・フルカ峠付近にて
講評：撮影場所はスイスのフルカ峠（標高2431m）で，峠から東側の水は黒海へ，西側の水は地中海に流れる分水嶺になっています．作品はU字谷を走るSLがテーマになっていますが，もう少しジオの要素を取り入れてほしかったと思います．

入選：「初めてのジオパーク」
高橋　伸輔［一般］

撮影場所：
秋田県男鹿市館山崎
講評：館山崎は男鹿半島の南部にあり，中新世台島層がよく観察できる場所です．中新世は日本海が拡大したときの火成活動が盛んだった時代です．今回の入選作品には中新世の地層を撮影された作品が４点もあり，日本列島の歴史の中で日本海の拡大がいかに大事件であったかがわかります．

入選：「夜来たる」
公文　俊朗［一般］

撮影場所：高知県　室戸岬
講評：昨年9月に世界ジオパークに認定された室戸の岩礁です．夜のとばりが下りる時刻に撮影されたもので、印象深い作品となっています．しかしこの作品は，どちらかというと風景写真に分類されるものです．優れた写真技術をお持ちですから，もう少しジオの要素を取り入れた作品作りも試みてはいかがでしょうか．

入選：「褶曲」　平山　弘［一般］

撮影場所：和歌山県すさみ町

講評：和歌山県のすさみ町海岸にある，日本では最もよく知られた“褶曲”です．もっともこの“褶曲”は構造運動による褶曲ではなく，海底に堆積した砂泥互層が海底地滑りで折り重なったできたランプ構造ではないかと考えられています．作者は地元の方で、潮の満干や太陽光の当たり方などを考慮して，良い撮影条件を選んで撮影しています．

入選：「しらひげの滝（青い池の上流には白い滝があった.）」　宇津木　圭［一般］

撮影場所：北海道上川郡美瑛町字白金 しらひげの滝

講評：この作品をよく見ると岩石の間から滲み出した伏流水がしらひげの滝を作っていることがわかります．この伏流水は十勝連峰に源を発するもので，岩石が白くなっているのも、水が青い原因も水に溶け込んだ硫黄などの成分が関係していると思われます．

入選：「凍土の星」　兼子　昌根［一般］

撮影場所：ロシア上空の飛行機内

講評：北極圏のシベリアに行くことは大変なことですが，ヨーロッパ～日本間の旅客機からはこの作品のように容易に眺めることができます．右上に下弦の月が写っていることから南西方向を撮影していることがわかります．低い山並みが続いていますが，シベリアのどのあたりを撮影したものでしょうか．

入選：「尖塔」　林　孝信［一般］

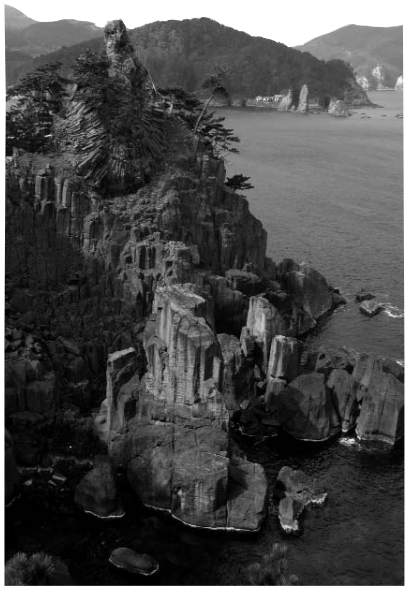
撮影場所：青森県下北郡佐井村長後縫道石地内仏ヶ浦

講評：青森県の名勝地，仏ヶ浦は中新世の海底火山活動によってもたらされた凝灰岩が侵食されたものです．仏ヶ浦は、観光船を利用して海から撮る，遊歩道を下りて海岸で撮るなどの撮影方法がありますが，この作品のように北側の国道から見下ろすと仏ヶ浦全体が見渡せます．手前の木の枝を避ける工夫をしたかった．

入選：「柱状節理」　辰巳　功［一般］

撮影場所：伊豆下田 爪木崎

講評：伊豆下田の爪木崎の柱状節理をとらえたものです．データを見るとｆ29、シャッタースピード30秒とありますから，夜間に三脚をかまえて月光下で撮影されたものでしょう．砕けた白波が柱状節理を照らし出し，格調高い作品となっています．



入選：「よろい岩」　中桐　晴己［一般］

撮影場所：島根県隠岐の島町中村海苔田ノ鼻

講評：隠岐諸島は2009年に日本ジオパークに認定された地域で，日本海が開いた時の火成活動の跡がよく保存されています．よろい岩はその中の名所の１つで，すでにあった粗面岩の中に玄武岩が貫入した地層ですが，この作品はその関係がわかりやすく説明されています．コンパクトデジカメで撮影されたものです．

＊今回，高校生以下での入選は該当がありませんでした．

国際地質学史委員会（INHIGEO） 2011年年会（豊橋・愛知大学）報告
Report：International Commission on the History of Geological Sciences（INHIGEO）annual Conference 2011（Japan）

猪俣道也・鈴木尉元

2011年８月２日から10日まで愛知県豊橋市の愛知大学で国際地質学史委員会（International Commission on the History of Geological Sciences，略称INHIGEO）2011年年会・講演会，ポスター展示，豊橋付近の巡検，紀伊半島から高野山・奈良・京都への巡検が実施され，無事終了いたしましたのでINHIGEOの歴史・日本開催までの経緯・実施されたセッション等の概要を報告します．

１．INHIGEOの歴史

通称INHIGEOと呼ばれるInternational Commission on the History of Geological Sciences（国際地質学史委員会）は，1967年に設立され今年で45年になる地質学史の国際的研究機関である．我が国からは当初小林貞一が正会員，渡辺武男が通信会員として活躍されていたが，1986年に渡辺が亡くなってからは関係が切れてしまった．1990年，学術会議地質学研究連絡委員会は，INHIGEO正会員に八木健三，通信会員に小林英夫，諏訪兼位，清水大吉郎，鈴木尉元を推薦して認められ，活動が再開された．現在日本からの会員は会田信行，平井　浩，猪俣道也，加藤茂生，金　光男，沓掛俊夫，岡田博有，諏訪兼位，鈴木尉元，栃内文彦，矢島道子，山田俊弘，八耳俊文の13名である．INHIGEOの各国委員は70歳未満の会員11名以下ということで，日本からの委員は定員一杯選出している．ちなみに2011年末の委員の総数は233名である．

２．INHIGEOの年会と日本開催での経緯

INHIGEOは，毎年７月から８月にかけて各国持ち回りで年会と巡検，ビジネスミーティングを開いている．年会はシンポジウム形式で行われることが多いが，シンポジウムの主題と関係のない講演も多い．なお４年に１回開かれる万国地質学会議（International Geological Congress，略称IGC）の折には同会議の会期中に年会が開かれる．2000年以後の開催地とシンポジウムのテーマを以下に記す．IGCと記したものは万国地質学会議の折に開かれたものである．

2000年　リオデジャネイロ（ブラジル，IGC）20世紀における地質学の歴史
2001年　リスボン・アヴェイロ（ポルトガル）建築石材，鉱山史と大型動物相
2002年　パリ（フランス）ドービニーと層序学
2003年　ダブリン（アイルランド）地質探検家
2004年　フローレンス（イタリー，IGC）地質学の歴史における研究所・博物館と学会
2005年　プラハ（チェコ）地球物理学の歴史
2006年　ヴィルニウス（リトアニア）第四紀地質学と地形学の歴史
2007年　アイヒシュテット（ドイツ）地質学と宗教の歴史的関係
2008年　オスロ（ノルウェー）極地探検史
2009年　カルガリー（カナダ）化石と燃料
2010年　マドリード・アルマデン（スペイン）金属鉱床の研究・探査の歴史

今回のINHIGEO日本開催の話が具体的に出たのは2006年７月，リトアニアにおける年会のビジネスミーティングの折で，その後INHIGEO日本委員の間で検討が始まった．2007年のドイツでのIMIGEOのビジネスミーティング時に出席したロシアと日本の委員から，2011年の年会を，それぞれの国が招致したいとの提案がされた．その後INHIGEOの会員全員の投票で，同年に「日本での2011年年会開催」が決まった．その後，日本開催の準備のため定数一杯までINHIGEOの日本会員の増員がはかられ，2011年会開催準備委員会が結成され準備が進められ，2010年年会（スペイン）時に１st circularが配布され参加者募集が開始された．更に２nd circular配布と具体的なプログラムの準備に入った．

しかし，開催準備中の３月11日に日本は東日本大震災・原子力発電所事故に見舞われ，外国の委員からのお見舞い・訪日に対する不安・心配のメールが多数入り，３月から４月にかけてこの会議の開催自体を危ぶんだことを悪夢のように思い出す．

３．国際地質学史委員会（INHIGEO）2011年年会参加者

参加者は，会議に65名（内海外から29名），会議後巡検に33名（内海外から23名）でした．総員233名で構成されておりますINHIGEOの年会といたしましては盛況だったと思います．その後，各国の参加委員から日本の自然と文化に触れての感動を伝える礼状が数多く寄せられ，会を主催いたしました関係者一同喜んでいる次第です．

４．セッション等の概要

今回の会議全体のテーマは「視覚イメージと地質概念（Visual images and geological concepts）」で，第１セッション「地質図及び関連する地質学的イメージの歴史」，第２セッション「地震学・火山学・テクトニクスの歴史」，第３セッション「地質科学史への一般的貢献」でした．2010年のスペイン年会時に1st Circularを配布し（猪俣2010），日本の年会での発表の募集を開始．今回実施されたプログラムの詳細は既に猪俣（2011）で報告してあるので参照されたい．

８月２日午前９時に愛知大学豊橋キャンパスの研究館一階ロビーで受付は始まりました．会議場・ポスター展示会場は，１階の隣接する場所に設定，10時に開会式が始まりました．先ず鈴木尉元　国際地質学史委員会2011年年会準備委員長の開会の挨拶の後，佐藤光彦愛知大学学長，次いで石黒　豊　豊橋市教育委員会教育部長の歓迎の挨拶がありました．その後，会場や会議に日程についての若干の案内・休憩の後，11時から招待講演が行われました．

最初はオーストラリアの科学史家オールドロイド（David Oldroyd）教授による「地質図の初期の発展―中国と西洋の文化の比較（The Early Development of Geological Maps: Comparisons between Chinese and Western Cultures）の招待講演で始まりました．以下，同一会場で研究発表が行われました．

第１セッションでは，加藤碩一産業技術総合研究所フェロー以下８件（内海外から７件）の講演がありました．日本（加藤碩一），ロシア（Zoya B. Bessudnova），ニュージーランド（Simon Nathan）からは19世紀の広域地質図の作成の歴史，Ezio Vaccariからは18世紀におけるヨーロッパの山脈のイメージ，Emie HammからはGoetheの地質イメージの話がありました．Martina Koelbl-Ebertからは，Mary Anningら女性による岩石や化石のスケッチなどを通じての地質学への貢献が紹介されました．Silvia F. de M. Figueiroaは，ブラジルの1859年から1861年の政府による最初の自然科学調査，Carol Baconからは，1859年のオーストラリア政府による最初のタスマニア調査について講演がありました．

第２セッションでは，明治・大正・昭和期の日本の代表的火山学者の業績紹介（諏訪

兼位），次いで日本における深発地震についての研究史（赤松　陽・足立久男），日本独自の発展を見た発震機構の研究史（鈴木尉元），第二次大戦後の日本の測地学的地殻変動の研究史（飯川健勝）の講演がありました．David Branaganからは，1923年の関東地震発生時に第２回汎太平洋学術会議出席のためシドニーに滞在していた大森房吉が，Riverview Collegeの地震観測所で地震計の記録を眺めていて，日本での大地震の発生を知ったとの話が紹介されました．Boumsoung Kimは，日本の地震学の初期に活躍した関谷清景や大森房吉の地震・津波に関する業績を紹介しました．Tatiana Ivanovaは，ロシアの最初の優れた地震学者Alexander Petrovitch Orlov（1840-1889）の紹介がありました．造構論に関しては，日本列島の形成に大陸移動説と対流説を適用した望月勝海の造構運動論の紹介（山田俊弘），プレートテクトニクス，プリューム・テクトニクス，さらにコア成長論を骨子とする造構論（丸山茂徳・熊澤峰夫）の講演がありました．

第３セッションでは，お雇い外国人Carl Schenk（小沢健志），Curt Adolph Netto（Kim Kwang-Nam），地球化学者高橋純一（梶　雅範），日本の女性地球科学者の嚆矢（矢島道子），1947年にオーストラリア近海に海底谷を発見したReg Sprigg，天皇海山列を発見した田山利三郎（中陣隆夫），1908年に北米で発掘された恐竜を世界各国へ贈ったCarnegieの話（Philippe Taque）などがありました．

その他日本における古生物学の近代化に貢献した化石研究会の歴史の話（後藤仁敏），北海道大学登山部の地質学への貢献の話（吉田　勝），またニュージーランドのカンブリア紀からの白亜紀の基盤岩のゴンドワナ大陸内での位置づけの話（Mike Johnston），火星の発展に関して独自の仮説をもっていたアメリカの天文学者Percival Lowellの理論的な背景を，新しい目をもって批判的に検討する必要を説いたVictor R. Bakerの講演がありました．

ポスター展示には，Benjamin Smith Lyman（Kenneth AaltoとKim Kwang-Nam）とRaphaell Pumpelly（鮎沢　潤）の北海道地質図，日本国地質調査所による縮尺40万分の１の予察地質図（山田直利），原田豊吉がヨーロッパ留学中に描いたイタリア・アルプスの地質図（Stephano Marabini and Gian Battista Vai）等が展示されました．

写真１　鳳来寺山自然科学博物館前にて（梶雅範撮影）

写真２　豊橋市自然史博物館のPhilippe Taque教授講演（同時通訳：松本涼子）（梶雅範撮影）

なお今回のINHIGEO年会の開催に際しまして，山田俊弘を中心として“An Introduction to the History of Geological Sciences in Japan”がJAHIGEO Newsletter No.13として刊行されました．これは内外に日本の地質科学の歴史を知らせる上での大きな貢献と考えます．

会期中巡検として８月４日には中央構造線，設楽原の古戦場と長篠城跡，鳳来寺山自然科学博物館（写真１），鳳来寺・鳳来寺山東照宮の巡検が実施され，８月５日午後は豊橋市自然史博物館で2011国際地質学史委員会（日本大会）記念講演会（公開講演会）としてPhilippe Taque教授の「アフリカの恐竜」（同時通訳：松本涼子）の自然史講座の講演が会場からあふれるばかりの聴衆の前で行われました（写真２）．

また，初日の歓迎会では長篠の陣太鼓の演舞，手筒花火の打ち上げなど披露，会議中の同伴者プログラムとしては，名古屋城や豊川稲荷など愛知県内の名所史跡等の見学が実施されました．

会議後巡検として，「地質学と日本文化の宗教とのかかわり」をテーマに紀伊半島一周の巡検が行われました．

第１日（８月６日）：鳥羽・伊勢神宮・七里御浜・熊野酸性岩・熊野
第２日（８月７日）：花の窟・紀和町鉱山資料館・那智勝浦（写真３）
第３日（８月８日）：橋杭岩・さらし首層・稲むらの火の舞台広村堤防・高野山真田坊「蓮華定院」宿坊

写真３　那智の滝の前にて（金光男撮影）

第４日（８月９日）：高野山大伽藍・同御社・石舞台・東大寺大仏・京都ガーデンパレス
第５日（８月10日）：京都にて，解散

５．終わりに

この会議開催前日の８月１日には，愛知大学にてIUGSの委員によるINHIGEOに対する監査が実施され，会長のProf. Silvia F. de M. Figueirôa（Brazil），事務局長のDr. Barry J. Cooper（Australia）が対応された．

巡検が終わった後の８月下旬から９月上旬にかけて，紀伊半島一帯は台風12号による風水害に見舞われ，那智の滝など各所で地滑り，崖くずれで通行不能箇所があちこちにできてしまい，会議中に台風に会わなかった幸運に感謝した次第でした．

この会議のProceedingsは2012年に出版予定で準備を進めております．従いまして，このProceedings出版をもって本会議の事務等が完了することになります．

参考までに今回の会議時に配布した,主な印刷物を次に示します．

INHIGEO 2011 JAPAN CONFERENCE ABSTRACT. 60 pages.（Appendix “An Introduction to the History of Geological Sciences in Japan” by Working Group of Japanese INHIGEO Members. JAHIGEO Newsletter　No.13, 2011）

David Oldroyd（2011）：The Early Development of Geological Maps : Comparisons between Chinese and Western Cultures（72 figures）.

Toshio Kutsukake（2011）Geology and History of the Shidara area, Aichi Prefecture,central Japan. 16 pages.

Toshio Kutsukake（2011）Geology and its reference to Japanese culture and

religion : Observed in the Kii Peninsula, southwest Japan. 13 pages.
加藤碩一・脇田浩二・菅原義明・宮野素美子・宮崎一博（2011）日本の地質図史．地質調査総合センター研究資料集 no.535, 産業技術総合研究所地質調査総合センター．

今回の会が成功裏に終わりましたことは共催していただいた日本地質学会と同会会員の皆様方の参加協力・支援によるものであることを御礼申し上げます．

今回の開催に向けて国際地質学史委員会日本開催準備委員会として，
委員長　鈴木尉元，事務局長　猪俣道也
委員　会田信行・平井　浩・加藤碩一・金光男・沓掛俊夫・岡田博有・故　大森昌衛・諏訪兼位・栃内文彦・矢島道子・山田俊弘・八耳俊文がINHIGEO委員（日本）として活動してきました．

また，今後のINHIGEO年会については，次のように予定されています．

2012年　the 34th International Geological Congress, 5-10 August 2012の時にAustraliaのBrisbaneで開催
2013年　Manchester, UK（in association with International Congress for the History of Science, Technology and Medicine），
2014年　United States（location yet to be decided），
2015年　Beijing, China，
2016年　Capetown, South Africa (in association with the 35th International Geological Congress)，
2017年　Yerevan, Armenia，
2018年　Mexico City, Mexico

関心のある方はIUGSのHP　http://www.iugs.org/に掲載されている「IUGS E-BULLETIN」を閲覧してください．

文　献

猪俣道也（2010）2010年国際地質学史委員会（INHIGEO）年会（スペイン）報告　地質学史懇話会会報　35, 47-49.
猪俣道也（2011）2011年国際地質科学史委員会（INHIGEO）年会（日本・愛知大学）報告　地質学史懇話会会報　37, 40-45.
猪俣道也（2011）2011年国際地質科学史委員会（INHIGEO）年会（日本）実施program及び関連写真　地質学史懇話会会報　37, 46-53.

CALENDAR

2012.4～

地球科学分野に関する研究会，学会，国際会議，などの開催日，会合名，開催学会，開催場所をご案内致します．会員の皆様の情報をお待ちしています．
★印は，日本地質学会行事．

2012年

4月　April

○東北大学・海洋研究開発機構合同シンポジウム
東日本大震災から１年 何を学び，どう活かすか
４月７日（土）10:00～17:30
場所：仙台市情報・産業プラザ多目的ホール（仙台市青葉区中央１-３-１AER５階）
問い合わせ先：海洋研究開発機構 事業推進部推進課
http://jamstec.go.jp

5月　May

○地質の日記念観察会「深海から生まれた城ヶ島」
５月12日（土）
日本地質学会ほか後援
問い合わせ：三浦半島活断層調査会事務局
E-mail：k345matsu@yahoo.co.jp
くわしくは，学会HP『地質の日』ページへ

○第５回ジオパーク国際ユネスコ会議
５月12日（土）～15日（火）
場所：島原復興アリーナ，雲仙岳災害記念館（長崎県島原市平成町）ほか
http://www.geoparks2012.com/

★街中ジオ散歩in Tokyo「身近な地層や岩石を知ろう」徒歩見学会
５月13日（日）10:00～16:00
日本地質学会・応用地質学会　共催
場所：東京都千代田区界隈
くわしくは，学会HP『地質の日』ページへ

★一般社団法人日本地質学会第3回（2012年度）総会（代議員総会）
５月19日（土）14:30～16:00
場所：北とぴあ　第２研修室（北区王子１-11-１）

○日本地球惑星科学連合2012年大会
５月20日（日）～25日（金）
場所：幕張メッセ国際会議場（千葉市美浜区中瀬２-１）
http://www.jpgu.org/meeting/

6月　June

○第５回フォーラム「ジオ多様性とは何か、その重要性を問う」
６月８日（金）・９日（土）
場所：JAMSTEC横浜事務所
詳しくは，学会HP行事カレンダーに掲載

○地質学史懇話会
６月10日（日）13:30～17:00
場所：北とぴあ９階901号室
中陣隆夫「R.C. ディーツ：大洋底拡大説の前夜」
石渡　明「（仮題）オフィオライト研究史」
問い合わせ：矢島道子<pxi02070@nifty.com>

7月　July

○ International Symposium on Zeolites and Microporous Crystals 2012（ZMPC2012）
（2012年ゼオライトおよびその類縁化合物に関する国際会議）
日本地質学会協賛
７月28日（土）～８月１日（水）
場所：広島市アステールプラザ（広島市中区加古町４-17）
http://www.zmpc.org/

8月　August

○第11回中生代陸域生態系国際シンポジウムおよび韓国の恐竜サイト巡検
シンポジウム：８月15日（水）～18日（土）
巡検（韓国南部の恐竜化石産出地）：８月19日（日）～22日（水）
場所：仙台市情報・産業プラザ多目的ホール（仙台市青葉区中央１-３-１AER５階）
問い合わせ先：海洋研究開発機構 事業推進部推進課
http://www.2012mte.org/

9月　September

★日本地質学会第119年学術大会（大阪大会）
９月15日（土）～17日（月・休）
場所：大阪府立大学ほか

11月　November

○27th Himalaya-Karakoram-Tibet Workshop
（第27回ヒマラヤ-カラコルム-チベット ワークショップ）
11月28日（水）～30日（金）
プレ・ポスト巡検（１～３日の３コースを予定）
場所：ネパール，カトマンズ
問い合わせ先：組織委員会
hkt27kath@gmail.com
http://www.ngs.org.np

博物館だより

産業技術総合研究所 地質標本館

特別展：砂漠を歩いてマントルへ ── 中東オマーンの地質探訪
Desert to Mantle: Exploring Oman's geology

開催時期：2012年４月17日（火）～ ７月１日（日）
場所：産業技術総合研究所 地質標本館
アクセス：〒305-8567
茨城県つくば市東１-１-１ 地質標本館
TEL：029-861-3750
URL1：http://www.gsj.jp/Muse/
URL2：http://www.aist.go.jp/db_j/list/l_event_event_main.html
開館時間：9:30 - 16:30（土日祝日も開館）
休館日：毎週月曜日
※但し，月曜日が祝日・振替休日の場合は翌日が休館日になります．

概要：地球上においては，人類は未だ地表から10kmほど下にあるマントルへの掘削にも成功していません．しかし，地球上には，陸上にいながらマントルの岩石を観察できる場所があります．そのひとつが，中東・アラビア半島のオマーンです．オマーンの山地には，海洋プレートの断面が見える「オフィオライト」と呼ばれる地層があり，海底を覆う溶岩から地下深部のマントルまでの岩石を連続的に観察することができます．本特別展では，オマーンの地質を中心に，中東オマーンの気候・地形・文化等について，パネルや岩石標本，立体地形図等を用いた分かりやすい解説をいたします．

展示内容：
－中東オマーンの紹介－
・駐日オマーンスルタン国大使からのメッセージ
・オマーンの自然と社会
・乾燥気候と砂漠
・ワジと灌漑システム
・オマーンと日本
－オマーンの地質－
・オマーンの地質
・海洋プレートとオフィオライト
・オマーン北部の地質とオフィオライト
・枕状溶岩：海底に噴出した溶岩
・シート状岩脈とはんれい岩
・かんらん岩とマントル
・先カンブリア時代の片麻岩と花崗岩
・アラビア大陸棚堆積岩層と堆積岩ナップ
・白亜紀末期から第三紀の堆積岩そして第四紀の地表堆積物
－オマーンの鉱物資源－
・オマーンの石油・天然ガス資源
・オマーンの鉱物資源とその分布
・オマーンの鉱床：銅とクロム
・オマーンの地質・鉱物資源に関する日本との共同調査・研究
－オマーンとジオツーリズム－
－オマーンの岩石・鉱物紹介－

国立公園リーフレット　たんけんシリーズ3

城ヶ島たんけんマップ 深海から生まれた城ヶ島

岩礁海岸を中心とした豊かな自然景観を楽しめる城ヶ島。ハンディタイプのリーフレットが出来ました。
裏面は、城ヶ島の空中写真に示した観察ポイントごとに写真やイラスト付きでわかりやすく解説。野外での観察にも最適です。

編　著：日本地質学会地学教育委員会
発　行：一般社団日本地質学会

会員頒価 300円
※20部以上ご注文の場合は割引あり

シリーズ1・2
「箱根火山たんけんマップ」
「屋久島地質たんけんマップ」
好評発売中！

購入希望の方は、学会事務局まで．e-mail：main@geosociety.jp　電話：03-5823-1150

☆中部支部 お知らせ

中部支部2012年年会開催のお知らせ

中部支部では下記の通り2012年支部年会を開催します．あわせてシンポジウムと地質巡検を計画しましたので，みなさまぜひご参加ください．

6月16日（土）
会場：岐阜大学教育学部B102教室
（交通アクセス：http://www.gifu-u.ac.jp/view.rbz？cd＝393）
（学内案内図：http://www.gifu-u.ac.jp/view.rbz？cd＝1360）
受付（10:30から）
総会（11:00～11:40）
シンポジウム（13:00～17:00）
「中部地方の活断層にかかわる最新の知見」
参加費：2,000円
講演者：
小井土由光（岐阜大学）
杉戸　信彦（名古屋大学）
金田平太郎（千葉大学）
竹内　　章（富山大学）
丹羽　正和（日本原子力研究開発機構）
吉田　英一（名古屋大学）
大谷　具幸（岐阜大学）
久世　益充（岐阜大学）
鷺谷　　威（名古屋大学）
講演タイトル等は後日，学会ホームページ上にて公開予定です．
個人講演（ポスターコアタイム）（17:00～17:40）
ポスター発表のみ受け付けます．ポスターは11:00から17:40まで掲示することができます．発表希望者は下記申込先まで，発表タイトル，発表者氏名，連絡先をお知らせください．
懇親会（18:00～20:00）（大学内施設を予定）会費　5,000円程度

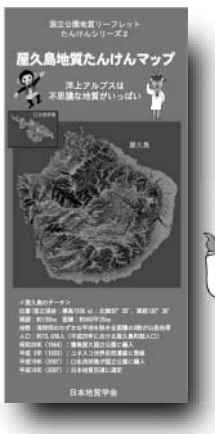
6月17日（日）
地質巡検「根尾谷断層にかかわる新知見」
定員20名，参加費：500円．
案内：金田平太郎・大谷　具幸
見学内容：1891年濃尾地震に伴う地表変位の痕跡，断層変位地形，断層破砕帯
日程：岐阜大学バス停8:30集合
岐阜大学8:40～9:40水鳥（段丘からの眺望，断層観察館）10:40～10:50中（断層変位地形）11:10～11:20越卒（バルジ地形とバイパス工事露頭）11:50～12:00大井（揖斐川断層トレンチサイト）12:20～12:30薄墨公園（昼食）13:10～13:20日当（断層破砕帯）13:50～14:20越切峠（濃尾地震の痕跡）14:35～14:45山県市役所（濃尾地震の影響による河川の立体交差）15:00～15:40岐阜大学（JR・名鉄岐阜駅方面に向かう人は途中で岐阜バスに乗り換えて16:00頃に岐阜駅到着の予定）

参加申し込み：総会・シンポジウムと懇親会の参加は当日まで受け付けし，地質巡検は定員になり次第締め切ります．準備の都合がありますので，できるだけ6月1日（金）までに参加内容（総会，シンポジウム，懇親会，地質巡検の別），連絡先（E-mailが望ましい）を明記して，E-mail，FAXまたははがきにてお申し込みください．
E-mail：tmohtani@gifu-u.ac.jp
ＦＡＸ：058-293-3080
はがき：〒501-1193　岐阜市柳戸1-1
（岐阜大学工学部社会基盤工学科　大谷　具幸）

国立公園リーフレット　たんけんシリーズ第2弾

屋久島地質たんけんマップ

ー洋上アルプスは不思議な地質がいっぱいー



かわいいキッキくんとシカノスケ博士が
屋久島の地質をわかりやすく紹介してくれます。

会員頒価 300円
※20部以上ご注文の場合は割引あり

編　著：日本地質学会地学教育委員会
　　屋久島地学同好会
発　行：日本地質学会
B2版　12折　両面フルカラー印刷

シリーズ1
「箱根火山たんけんマップ」も
好評発売中！

購入希望の方は、学会事務局まで．
e-mail:main@geosociety.jp　電話:03-5823-1150

学　会　記　事

一般社団法人日本地質学会の議事録を掲載しています．

一般社団法人日本地質学会
2011年度第３回理事会議事録

日　時：2011年12月３日（土）13:00～17:00
場　所：総評会館　402会議室（千代田区神田駿河台３-２-11）
出席役員　理事（26名）：宮下純夫会長　久田健一郎副会長　安藤寿男　石渡　明　伊藤谷生　井龍康文　上砂正一　永広昌之　北原哲郎　斎藤　眞　坂口有人　佐々木和彦　柴　正博　高木秀雄　高橋正樹　竹内　誠　田村嘉之　内藤一樹　中井　均　平田大二（14時半退出）　福富幹男　藤林紀枝　藤本光一郎　星　博幸　保柳康一　脇田浩二
欠席役員　理事（23名）：渡部芳夫副会長　天野一男　太田泰弘　奥平敬元　小山内康人　狩野彰宏　小嶋　智　紺谷吉弘　榊原正幸　芝川明義　竹下　徹　田近淳　西　弘嗣　楡井　久　松岡　篤　松田博貴　松原典孝　向山　栄　村田明広　矢島道子　山口耕生　山田泰広　林　愛明
監事（２名）：青野道夫　山本正司
その他出席者　オブザーバー：山本高司（関東支部幹事長）　事務局：橋辺
＊成立要件：理事総数49名の過半数　25名，本日の出席者26名で本理事会は成立．
＊議決：出席者の過半数14名
＊書記として，脇田浩二理事，北原哲郎理事を選出した．

報告事項

１．執行理事会報告
・藤本常務理事より，10月８日開催の2011年度第４回執行理事会および11月12日開催の第５回執行理事会に関する報告と説明がなされた．その他，支部・専門部会のSNSを立ち上げたので活用されたい．

２．個別の報告
１）行事委員会報告（星）
2012年学術大会（大阪大会）および2013年学術大会（仙台大会）についての準備状況報告があった．
２）地質学雑誌編集委員会報告（小嶋：藤本代理説明）
非会員論文掲載に関する報告とお詫びについて説明があった．再発防止策として「筆頭者が会員であること」をチェック項目として追加した．
３）アイランドアーク編集状況報告（井龍）
投稿が低調であり，今年度は契約している総ページ数825ページのうち，558ページに留まった．来年度も825ページとする．積極的な投稿をお願いしたい．
カラー印刷が目的のピクトリアルで図表が白黒で印刷されたものがあり，出版社に厳重注意を行った．
４）ジオパーク支援委員会報告（高木）
HPに掲載のポスターは随時新しい情報に入れ替えている．ジオパークネットワークのメンバーは着実に増えつつある．今年は室戸が世界ジオパークとなり，現在，隠岐が申請審査中である．また，日本ジオパークとしていわて三陸や三笠市，千葉市で新規の動きがある．
５）地質災害委員会報告【報告資料④-４】（斎藤）
・台風12号による地盤災害調査合同調査団（地盤工学会，地質学会，応用地質学会，関西および中部の各地質調査業協会）による報告書が完成．
・上記合同調査に参加した会員の野外調査費として４－５万円ほど支出予定．
・野外調査の安全指針については９月の第２回理事会で承認され，指摘があった箇所を修正．しかし現状では参加者の保険などの取り扱い以外，経費負担などについてのルールが決まっておらず，早急にルールを整備する必要がある．
６）その他
①　「行動規範」については前回９月の理事会で承認されているが，会員に向けての前文を付加し，また，一部文言の整理，修正をした．間もなく発行される会員名簿にも倫理綱領とともに掲載することが藤本常務理事から報告された．
②　「寄付金等取扱規則」については前回９月の理事会で承認されているが，指摘があった箇所を修正（３条を３条・４条に分けて記載）したことが向山理事に代わり，藤本常務理事から報告された．
③　上砂理事より，放射能測定・調査研究委員会の設立については前回９月の理事会で承認されているが，指摘を受けた点も含め，趣意書と規則について執行理事会との間で検討し，修正したことが説明された．来年２月福島においてシンポジウムを予定している．
④　会員の応募による復旧復興に関する補助事業については今年度は８件採択したが，財政面を確保しながら来年度も継続していきたい．今年度の成果については，大阪大会での発表を義務付けてはいるが，惑星連合の際にも何らかの形で紹介したいとのことが，復興事業検討WGの高木理事より報告された．また，新聞等で紹介された事業についても報告されたのを受けて，震災復興事業全体を地質学会としてプレスリリースすべきという意見も出された．
３．理事からの報告事項
・地学オリンピック支援委員会（久田理事）
地学オリンピックの来年度の選抜に向けては924名の参加申し込みがあった．今年のイタリア大会において日本は金１，銀２，銅１獲得（26ヶ国，104名参加）．近年東南アジア諸国が台頭してきており，今回はタイにメダル数で抜かれた．
・環境地質部会（田村理事）
６月８日に液状化に関するシンポジウムを浦安にて共催した．また，12月18日には潮来市主催，部会共催で「利根川中・下流域の液状化・流動化・地波現象」を開催予定であることが報告された．
４．その他
・各賞選考に関する問題点については藤本常務理事から，これまでの申し送り事項は概ね検討済みであるが，候補の推薦数が非常に少ない，うまい方策があれば意見をいただきたいとの報告があった．今年度は12月26日必着で締め切られるが，多くの推薦を出すよう，理事各位にも呼び掛けられた．

審議事項

１．定款の修正について
藤本常務理事より，定款第33条の理事，監事の選任については総会決議を必要としていたが，これを，総会への報告事項に改正とする提案について説明があった．佐々木理事より改正理由の文章のうち，文末の「万が一，・・・」の２行は不要ではないかとの意見があり，文末２行を削除し，賛成多数で改正案が承認された．
またあわせて，運営規則のいくつかの条文の文言を微修正（現組織等に合致したもの）する提案があり，これを承認した．

２．技術者教育委員会の設立について
小嶋理事ほかより技術者継続教育委員会ならびにJABEE委員会を廃止し，技術者教育委員会を新設することが提案され，代理で藤本常務理事より提案理由の説明があった．福冨理事より，委員会の名称として技術者教育という言葉は他学会のCPDプログラムに用いられており，混同する可能性があるため，【地質】技術者教育委員会としてはどうかという提案があった．名称を「地質技術者教育委員会」とすることにより賛成多数で承認された．

３．学術大会の回り持ちについて
星理事（行事委員会）より，年会の支部回り持ちと諸般の事情で回り持ちに割り込んで開催したい大学等がある場合の取り決め「年会の回り持ちに関する申し合わせ」が提案された．なお，この申し合わせ（案）について，予め各支部に対し意見聴取を行ったところ，東北支部からは，　割り込む場合の取り決めについて意見が出され，東北支部選出理事の永広理事より説明があった．割り込む際のある程度の事情は考慮する必要があるものの，交代する相手（支部）がいることでもあり，割り込み後のローテーションと割り込む際の手続き（案）が，議論された．
原案では，割り込み希望がある場合には，

3）開催希望年の4年前の8月末日までに連絡することとなっているが，支部毎に総会開催月が異なることもあり，3月にしてほしいとの意見が出た．

また，回り持ちローテーションの考え方を記載した申し合わせ（案）の文末5行については削除し，内容について再度整理したうえで次回理事会にて審議することとなった．

4．2012年度の事業計画基本方針について

宮下会長から，2012年度事業計画骨子の説明があった．骨子については以下のような意見があった．

指摘のあった事項について検討，修正を行い，次回理事会に再提出することとなった．

・1. 1）の「災害に関する知識」ではわかりにくいため，「災害に関する地質学的知識」としてはどうか．
・1. 3）の防災教育は工学的・社会学的要素も入っているため，自然災害に関する地学教育としてはどうか．
・4．新指導要領に沿って地学（4単位）と地学基礎（2単位）が実施されることになるが，ほとんどが地学基礎を採用することになると思われる．ただ，地学基礎だけでは不十分であり，自然災害に関する取り組みもしにくいと考えられる．新指導要領は，震災前にまとめられたものであり，東日本震災を受け，見直しもあり得るのではないか？様々な提言をすべきではないか？
・次の指導要領の検討が5～6年後から始まるので，次の改定に向けて今から取り組む必要がある．

5．2012年大阪大会・2013年仙台大会の開催基本方針および行事内容について

＜2012年大阪大会関連＞

近畿支部として，上町断層と都市地下構造についてのシンポジウムを実施したいが，その他のシンポジウムについては支部では対応しきれないため，学会主導でお願いしたいとの要望があった．

これに対し下記のような意見があった．

・東海・東南海・南海3連動といった海溝型地震のシンポジウムが必要ではないか
・台風12号災害を含めた自然災害のシンポジウムを実施してはどうか
・2012年度事業計画とリンクさせるべきではないか
・学会の事業をアウトリーチする取り組み（例えば震災復興関連の取り組み）が必要

＜2013年仙台大会関連＞

12月17日に支部総会を実施予定．テーマ等については未定．主に巡検についての相談となる．鉱物科学会との共催はない見込みである．

これに対し下記のような意見があった．

・水戸大会の共催についてはスケールメリットがあった．アンケート結果でも好意的であった．
・いわて三陸ジオパークや「宮沢賢治と地質学」といったシンポジウムが受けるのではないか．
・東北は地熱発電が盛んでもあり，再生可能エネルギーについてのシンポジウムはどうか．

6．名誉会員推薦委員会委員の選出

理事会推薦委員1名として永広理事の推薦があり，以下の階層別ならびに職責委員とともに承認された．

なお，委員長は久田副会長が務める．

・階層別委員　大学；佐野弘好（九州大学），官公庁；栗本史雄（産総研），小中高；田中義洋（学芸大学附属高，会社；須藤　宏（応用地質㈱）
・職責委員：支部長　竹下　徹，竹谷陽二郎，伊藤谷生，原山　智，宮田隆夫，臼井朗，宮本隆実

7．その他

1）来年度の総会開催日について

2012年度の総会は，5月19日（土惑星連合前日）に開催することを承認した．開催時間は14:30の予定とし，総会開始前にフォトコンテストの表彰式を行う（13:30～）．

2）理事会推薦監事候補者について

社外監事候補者として，現監事の山本正司氏を決定した．山本氏には内諾を得ている．

3）地質調査研修事業について報サービス（株）の解散に伴い，同社から，産総研の認定研修制度を利用した地質調査研修事業について地質学会が継承できないかという検討依頼を受けた．講師1人に対し受講者3名を上限とし，千葉の東大演習林などを用いて実施してきた（最大受講者数6名程度）．顧客を引き継ぐ形で，また，新たに地質学会の事業として，関東支部の協力のもとモデルケースとして実施することが説明された．

これに対し下記のような意見が出された．意見については今後検討していくこととし，モデルケースとして事業自体を引き継ぐことが承認された．

・会員向けのサービスとして位置付けてはどうか．
・単に地学情報サービス（株）の事業をそのまま引き継ぐのではなく，地質学会としてのビジョンを持って実施してほしい．関東支部の具体的検討は，その方向で進んでいる．
・地質学会が与えるなんらかの研修認定の制度が必要である．
・大学の授業とリンクして，進論履修者には審査のうえ単位を与えることとしてはどうか．

2011年度
第5回執行理事会議事録

期　日：2011年11月12日（土）13:00～17:00
場　所：地質学会事務局
出席者：宮下会長　渡部副会長　久田副会長（14:30頃出）　藤本常務理事　齋藤副常務理事　石渡　小嶋　坂口　高木　藤林　星　内藤　向山　平田　山口各理事，（事務局）橋辺
欠席者（委任状提出あり）：井龍（宮下）　中井　西
＊定足数（12，委任状含む）に対し，出席者15名，委任状1名，合計16名の出席．
＊前回議事録の承認

議事録の修正について

修正文は渡部副会長から（研修事業について）

Ⅰ　審議事項

1．学術大会の回り持ち（維持・一部変更等）に関する申し合わせ案（星）

本案を12月の理事会に提案することとし，一部修正の上，承認．予め支部長連絡会議で検討してもらい，意見を理事会で出してもらう．重要な点は回り持ち順に割って入るように開催を希望する機関（または支部）があった場合の手続き．

2．技術者教育委員会の新設，同委員会規則案（小嶋）

JABEE委員会および技術者継続教育委員会を廃止して，新たに技術者教育委員会を新設することを12月の理事会に提案する．新委員会の委員は現JABEE委員会委員長，継続教育委員会委員長，応用地質部会長，JABEE認定を受けた各大学の担当者，応用地質関係企業勤務の会員などを予定している．

委員会の今後のロードマップ・長期ビジョンは，委員会が立ち上がる前に考えておいた方が良い．たとえば，JABEEはワシントンアコードに基づいているが，工学系によるものなので地質にはなかなか馴染まない点がある．情報系がソウルアコードを作ったように，困難なことではあるが別のアコードを作るというような考え方もあっていい．カナダ，イギリスの地質技術者はJABEEにはよらない別の枠組みで認定している．学術会議で地球科学教育の質保証の問題が始まりつつあるが，技術者教育とはやや異なる面もあると予想される．

3．サイエンスライター応募について（坂口）

5名の会員の応募があった．学会としては，地質学の普及のためにライターを育てる目的と，学会としての広報記事を増やす目的がある．議論に加わっていただいていた未来館の担当者（会員外）も加え，当面6名体制で行う．

主たる目標は広報誌を考えて，各ライターの得意分野が偏っている可能性が高いので，今後は追加メンバーも検討する．

学会として，普及・広報に必要な記事をライターに委託して原稿を書いてもらう，内容のチェックは広報委員会が行う，原稿の著作権は地質学会に帰属する，ことなどを応募者に確認したうえで具体的に進めてゆく．

4．選挙立会人2名の選出
2012年度の選挙のための立会人として，次の２名の会員を選出した．
立会人　巌谷敏光（GSJ），山本由弦（JAMSTEC）

5．12月の理事会議案
・学術大会の回り持ちについて
・定款の修正について
・技術者教育委員会の設立について
・2012年度の事業計画（事業部会，専門部会，支部等に事業案の提出を求める）
・2012年大阪大会・2013年仙台大会の開催基本方針，行事内容の検討・各賞選考に関する問題点について（申し送り事項等について）．

6．定款について
定款第33条の２項の理事の選任に関し，「・・・・総会はこれを決議する」を「総会に報告する」と変更することを理事会に提案する．
総会では，選挙結果の承認（理事の選任）を行い，総会後，第１回目の理事会を開き代表理事以下を選任する．代議員には理事会終了後，速やかに報告を行う．
変更条文：
「理事会は，理事会規則により会長１名，副会長２名，常務理事１名，副常務理事１名および執行理事を選任し，総会に報告する．」

Ⅱ　報告事項

(1) 運営財政部会：総務委員会
＜共催・後援依頼，他団体の募集等＞
1．アイソトープ協会より「第49回アイソトープ研究発表会」の共催依頼（2012/７開催予定）
例年通り共催を承諾し，運営委員として山口耕生理事を推薦することとした．
2．第２回ジオパーク洞爺湖有珠山大会終了挨拶
＜外部の賞＞
1．第53回藤原賞の推薦（〆切１/31，学会〆切１/10）→HP, geo-flash, News誌に掲載
＜その他＞
1．平成24年度東大海洋研究所・国際沿岸海洋研究センター共同利用の募集（〆切11/30）
2．（独）原子力安全基盤機構理事長の交代
新理事長：中込良廣
＜会員＞
1．今月の入会者（１名）
正会員（３名）
上澤真平　宮坂瑞穂　苅谷愛彦
2．今月の退会者（０名）
3．今月の逝去者（１名）
正会員：宮地直道（10/30）
4．10月末日会員数
賛助：26　名誉：72　正会員：4046（正会員：3853，院割正会員：181，学部割正会員：12）
合計4144（昨年比　－98）
＜会計＞
1．水戸大会の２学会の収支概算
大きな赤字／黒字にならない見込み
2．緊急調査および災害調査の調査団を組織した場合の経費支出に関すること．
紀伊半島の斜面災害調査団の経費の支出要請が近々ある予定，それを見たうえで，今後のルール作りも合わせて検討する

(2) 広報部会：広報委員会（坂口）
・第３回地球惑星フォトコンテストの募集開始
・支部，専門部会のSNSが11/19-20に立ち上がる見込み

(3) 学術研究部会：行事委員会（星）
1）大阪大会
・見学旅行案内書の編集体制が決定．
・シンポジウムの検討を近畿支部に依頼．内陸地震と地質構造，およびアウトリーチ関係のテーマが検討されつつある．アウトリーチ関係の検討には執行理事会（社会貢献部会）が協力することを確認．
・大会スローガンは，シンポ等の内容を見ながら実行委員会に検討を依頼する．
・トピックセッション募集記事をニュース誌１月号，年会予告記事を５月号，プログラム記事を８月号にそれぞれ掲載予定．演題登録（講演要旨提出）締切は７月初旬を予定．
・引き続き，アカデミックブレインズ（大阪）に業務の一部を委託することを確認．
2）2013年仙台大会
・見学旅行が東北支部総会（12月，福島市）で検討される予定．行事委員会から星が出席予定．

(4) 学術研究部会：国際交流委員会（石渡）
・IODPからUSAが撤退する意向．AGU時に検討を行う予定．
・国際賞は会員でも可，学会表彰は賛助会員でも可である（確認）

(5) 編集出版部会：地質学雑誌編集委員会（小嶋編集委員長）
1）今月の編集状況（11月10日現在）．
・投稿論文総数74編［総説15（和文14，英文１），論説38（和文36，英文２），ノート13（和文13），報告８（和文８）］口絵８（和文７，英文１）
＊論説には５/31までに投稿された短報を含む．
・査読中58編　　受理済み　17編（うち通常号５　特集号12）
2）学会員以外の論文の出版について
・10月号に非会員が筆頭の論文が掲載された．理由はいくつかあげられるが，基本的には，受付の段階及びその後のチェックが適切に行われなかったことである．チェック体制を再度確認し，再発防止に努めることとした．編集委員長名で理事会に報告と謝罪をする．また，編集後記においても，一般的な問題として注意喚起を促すこととした．

(6) 編集出版部会：アイランドアーク編集委員会（井龍編集委員長）
・資料による編集状況の報告

(7) 企画出版委員会（山口）
・城ヶ島たんけんマップの残部僅少のため，年度内に増刷予定．
初版は3000部印刷しているが，増刷も3000部を予定．
・ポスター「超歴史年表」の再投稿について

(8) 社会貢献部会（藤林）
1）地質の日の行事（藤林）
・第３回フォトコンテスト（2012年）の入賞写真は千葉県立中央博物館で展示していただけることとなった．
詳細は担当者間で今後つめていく予定．来年５月の執行理事会の開催日程についても要検討．
フォトコンの表彰式は2012年５月19日（土）の総会において行う（総会開始の直前を予定）．
・2012年度の地質の日の事業については応用地質学会との共催事業を企画中
・2011年度第5回「地質の日」事業推進委員会の報告
・2011年度「地質の日」の全国の事業のまとめ
・来年度の事業の推進を支部に連絡する．
・地質の日のポスターの印刷費について，資金拠出の依頼がある（参加学会・機関全体で13万円強/年負担する）．

(9) ジオパーク支援委員会（高木）
特になし

(10) オリンピック支援委員会
・委員会活動報告
・JSTでは国内の各オリンピックの事務を可能な限り統合する方向である．
科学の甲子園（化学，物理，生物，地学，情報，数学）：47都道府県代表により2012/３/24-25に甲子園で全国大会を行う．７月～2012年２月の間，都道府県予選会を行い出場チームを決定．

(11) 震災復興事業プラン検討WG（高木・向山・藤本・斎藤）
・歌津魚竜館大型標本レスキュー事業（永広会員）については文化庁の予算がつき，地質学会の経費負担はないことになった．このため，申請者より，事業内容の変更の申し出があった．検討の結果，前回の応募事業は白紙に戻すこと，既に本事業の応募は締切られているが，新規の事業として応募することを特例として認めることとした．
申請者からは改めて，レスキューされた資料標本を安全に保管・継承し，展示等に活用するために，標本の洗浄・消毒および修復などの作業を行う事業としての応募が11月９日にあり，WGではその応募を採択することとなった．
・成果報告を連合の時に地質学会ブースでできればよい．

(12) 連携事業委員会（渡部）

・契約内容の変更（委員会開催時期の変更）を合意.

・将来の報告書の基準になるような報告になればよいとの話があった.

(13) 地質災害委員会（斎藤）

・台風12号による地盤災害合同現地調査団報告会の開催

主催：地盤工学会関西支部，応用地質学会，関西地質調査業協会　後援：近畿建設協会

・11月24日（木）13:00～17:30　エル大阪南ホール

・検討課題：緊急調査および災害調査の調査団を組織した場合の経費支出.

2011年度
第6回執行理事会議事録

期　日：2011年12月13日（土）10:00～12:00

場　所：総評会館　402会議室

出席者：宮下会長　久田副会長　藤本常務理事　齋藤副常務理事　石渡　井龍　中井　坂口　高木　内藤　平田　藤林　星　竹内（理事会議長）各理事，（事務局）橋辺

欠席者（委任状提出あり）：渡部副会長　小嶋　西　向山　山口　各理事

＊定足数（12，委任状含む）に対し，出席者13名，委任状5名，合計18名の出席.

＊前回議事録の承認

＊　資料は，理事会との共通です.

Ⅰ　審議事項

1．2012年度の事業計画基本方針について【審議資料④　参照】

会長以下で検討した事業計画方針案について，文言の修正等（指導要領改訂→新指導要領実施）をして理事会に提案することとした.ロンドン地質学会が2014年出版で日本の地質の紹介本を出すことになったので協力していく．英語圏で読んでもらうので，やむを得ないところ.

2．理事会推薦監事候補者について

現任の山本正司氏の内諾を得たので，理事会に提案する.

3．理事会議案の検討と確認　【審議資料参照】

技術者教育委員会の新設提案に際し，JABEE，技術者継続教育委員会のこれまでの活動の総括をしてほしい.

4．理事会の議事進行の検討　【理事会議事次第　参照】

5．その他

・各賞についての問題点は現時点では特にないが，推薦者数の不足などは依然としてあるので，積極的に周知，案内をしていく.

・今回は理事会の出席者が少なく成立が危ぶまれた．特に12月の場合には理事会の開催日程を考える必要があるのではないか．理事会の開催は定款で3回以上と決められているが，審議内容のタイミングなども考慮して，現状の各回の開催時期全体を見直す必要があるとして，今後検討することとなった.

Ⅱ　報告事項

(1) 運営財政部会：総務委員会

＜共催・後援依頼，他団体の募集等＞

1．産総研地質調査総合センターから，「第1回アジア太平洋大規模地震・火山噴火リスク対策ワークショップ」(2012/2/22-2/25，つくば）の後援依頼があり，承諾した.

＜その他＞

1．日本地球惑星連合が再申請後3カ月で公益社団法人の承認を受けた（12/1付）

11/13の学協会長会議でも，学協会は公益法人に比較的なりやすいという話があった（久田）学会は承認されやすくなったが，公益法人としての制約および事務的なことには手間がかかる.

2．第9回高校生科学技術チャレンジJSEC2011の最終審査会・表彰式（12/03）の案内があったが，理事会と日程が重なっており，地学教育委員からも都合がつかず欠席とした.

矢島理事は審査委員として参加.

＜会員＞

1．今月の入会者（3名）

正会員（3名）　大平哲世　名内理恵　松浦康隆（院割）

2．今月の退会者・逝去者　なし

3．11月末日会員数

賛助：26　名誉：72　正会員：4050（正会員：3856，院割正会員：182，学部割正会員：12）合計4148（昨年比　－98）

4．2011年度末（2012/03）の退会予定者（35名），除籍予定者（75名）の一覧を回覧.

5．2011年版会員名簿：12月中の発行を予定し校正中

名簿に掲載する規則類の軽微な修正については，理事会の承認を受けて掲載する.

＜会計＞

1．水戸大会の2学会の収支の詰めと調整については，今年中に両学会の担当者で行う予定.

2．地学情報サービス解散に伴う地質図残部の原価引き取りについては，先の執行理事会で了承されたので同社の11月末での事業整理に合わせて支払いをした．なお，残部については11月中に販売促進のセールが好評であったので,引き続き第2弾のセールをおこない，代金の回収に努める.

(2) 広報部会：広報委員会（坂口）

・会員から募集したサイエンスライターについて，最終的には以下の方々にお願いすることとなった．地学オリンピック支援委員会ならびに広報委員会から一部の委員が加わり，活動を開始した.

会員：遠藤大介・川端訓代・北村有迅・笹沢教一・正木裕香

非会員：岡山悠子（日本科学未来館））

・支部，専門部会のSNSシステムは本番サイトへの移行後，現在最終調整中.

(3) 学術研究部会：行事委員会（星）

・行事委員会の組織，大阪大会　ほか【報告資料②　参照】

・大阪大会のシンポジウム（一般公開）について，12/4開催の近畿支部の総会で議論される予定．大阪の地下構造と内陸地震に関すシンポジウムは支部主体で行い，アウトリーチ・教育やジオパーク関連等のシンポジウムは，学会主導で企画してほしいという意向が近畿支部から出されている.

・年会の支部回り持ちについて各支部の意見を聴取した．東北支部から提案があったため，理事会で議論する.

(4) 学術研究部会：国際交流委員会（石渡）

・アイランドアーク賞の選考が進んでいるところ.

(5) 編集出版部会：地質学雑誌編集委員会（小嶋編集委員長）

(6) 編集出版部会：アイランドアーク編集委員会（井龍編集委員長）

編集状況の報告【報告資料⑤　参照】

・vol. 20, no. 3で本来カラー印刷すべきピクトリアルがモノクロとなった，ピクトリアルのインデックスマップの引用がなかった等の問題点があった．今年は825pの予定が558pになり，予定より267p少なかった．招待論文がvol. 21, no. 1に初めて掲載される.

(7) 企画出版委員会（山口）

・城ヶ島のパンフレットが残り200～300部になったので，3000部増刷する．この際必要な修正は行う.

(8) 社会貢献部会（藤林・中井・平田）

・フォトコンテストの表彰式は代議員総会の前に北とぴあで行う．フォトコンテストの展示は千葉県立中央博物館と共催で，同館を会場に約1か月間行う.

・応用地質学会と共催の「地質の日」事業として，都内で市民向け屋外探検を企画し，そのルートを選定中.

・世田谷の看板の誤りの検討については滞っており,これから修正を助言していく予定.

・教員の採用状況をニュース誌に掲載する予定．少し増加傾向にはある模様.

(9) ジオパーク支援委員会（高木）

ジオパークの現況について，理事会に報告する.

(10) オリンピック支援委員会

12/18に来年に向けての筆記試験が行われる．924名が申し込んでいる．本戦への参加資格がない中1－2生が40名ほどおり，この層をもり立てていくための賞等が必要であろう.

(11) 震災復興事業プラン検討WG（高木・向山・藤本・斎藤）

前回の理事会以降に採択された2件と，その後の研究状況を理事会に報告する

(12) 連携事業委員会（渡部）

(13) 地質災害委員会（斎藤）

・台風12号による地盤災害合同現地調査団から報告書が出版された．

・合同調査団に参加した会員の実費経費（宿泊代）として５万程度の支出があるが，総務部会と相談して負担することとした．来年度は災害時の予算を盛るとともに，支出のルールをつくっておくこととしたい．

・野外調査の安全指針の修正確認【報告資料④-４　参照】

前回の理事会において承認されているが，指摘のあった点を修正したので，理事会に報告する．

(14) 行動規範について（藤本）【報告資料④-１　参照】

前回の理事会において承認されているが，会員名簿等で公表するため，前文の追加，一部文言の修正を行ったので理事会に報告し確定とする．

2011年度
第７回執行理事会議事録

期　日：2012年１月９日（月，休）13:00～17:00

場　所：地質学会事務局

出席者：久田副会長　渡部副会長　藤本常務理事　齋藤副常務理事　石渡　井龍　小嶋　坂口　高木　内藤　中井　平田　星　向山　各理事，（事務局）橋辺

欠席者（委任状提出あり）：宮下会長　西（石渡）　藤林　山口　各理事

＊定足数（12，委任状含む）に対し，出席者14名，委任状４名，合計18名の出席．

＊前回議事録を承認した．

Ⅰ　審議事項

１．2012年度の事業計画基本方針案の再検討について

理事会の議論に基づいて，事業計画の具体的な内容等を再検討した．いくつか修正意見が出て，修正することとした．

・会員減をくいとめることは無理な状況であるが，施策としては重要なことであるので，「会員増を目指す」，とする．

・「高校教員の大幅採用」というのは難しいので，「増加を目指す」ことにする．これについての具体的な行動がありうるかどうかは，検討が必要．

・「理事会の役割強化」ということについては，理事会の役割は定款で決められているので，「理事の役割の強化」という方向で書き直す．

・「東日本大震災に対する取り組み」というのは，「防災・減災に対する取り組み」とする．

・「ホームページの強化」については，日本語の足りない部分の強化，英語版の外注等を念頭に置いた具体的内容のある文言にする．

２．年会行事関係について提案

１）“The Geology of Japan”（英国地質学会GSLより2014年出版予定）執筆への協力と2012年年会（大阪）におけるこの書籍の出版に向けての英国地質学会との共催シンポジウム開催について（石渡）

日本側では，WALLIS氏が編集陣に加わっているが，現時点では，地質学会として当該書籍に関与・協力する体制にはなっていない．関与・協力すべきか，どうかの議論をおこない，したほうがよいという方向で，大阪大会でのWorkshop開催等を通じて協力することとした．

２）2013年年会（仙台）における米国地質学会（GSA）のGlobal Meetingとの共催について（石渡）

Global Meetingは全体テーマがはっきりした，米国で開催する学会で，参加登録費は3万円前後（会期中の小巡検付き）であり，巡検を重視する．東北大学内において仙台大会と同時開催で行う意向をGSAに伝えるとともに，開催に際しての先方の希望を聞く．

３）韓国地質学会との交流（高木）

新会長　Yu, Kang Min 教授（兪剛民，延世大学校）の大阪大会への招待について

交流協定を結んでいる国とは，基本的に双方の会長在任中に１度は交流の場を設けるべきとのことから，招待する方向で話を進めることとした．

３．HPに「地質学者に聞いてみよう」コーナー開設の提案（石渡）

火山学会の火山学者に聞いて見よう」コーナーは諸般の事情により現在受付停止状態となっている由．地質学会としてはアウトリーチとして，その役割を担うべきではないかとのことで，開設を検討した．

現在既に掲載されているQ&Aや今後掲載するQ&Aそれらの中に適切な回答が見いだせない場合に質問を，という感じにする．回答者の選出については，専門部会等にシニア会員の活動の場をつくることを含めて検討してもらいたいが，とりあえず，常務陣をキーパーソンとして，開始することとした．

４．友の会の開始について：友の会SNS利用規則の策定（坂口）

SNSの試験運用は開始されたが，盛り上がりが不足しているので，学会側から定期的な刺激策としてサイエンスライターの原稿や，トピックを流す必要があると考えている．

SNSは，ユーザーが勝手にグループを作ることかできるのがメリット．現在，40数名の参加者で６グループできている．

友の会のポスターを作成し，全国の高校に配布することを予定している．

利用規則案の検討では，規則策定の趣旨をはっきりと書くよう指摘があった．リンク禁止の項目では，禁止項目番号を具体的に示しておくよう求められた．また，本規則の依り代となる学会倫理規定をSNS会員にも援用するようにしておく．

これとは別に，学会の権限や運営者側が守ること，担当は誰，等のこのSNSは何かということを学会として定義する規則が必要となる．これについては，広報委員会の細則としてつくり,執行理事会承認，理事会報告の手続きをとる．新学期に合わせて本格開始する方針を承認した．

５．その他

１）北中康文ほか著による「列島自然めぐり日本の地形・地質－見てみたい台地の風景116」

（３月中旬出版予定，文一総合出版）について，学会推薦名義使用の申請があり，これを承認した．

２）各賞選考検討委員会理事会推薦委員の選出

指定委員：宮下純夫・石渡明・鳥海光弘・岩森光・小嶋智・久田健一郎・井龍康文・前川寛和・Simon Wallis

執行理事会推薦委員として，ご本人の了解を得て，松本良会員，大友幸子会員を推薦することとした．

３）地球史ポスターの件

リーフレット委員会から再修正された原稿に対しての意見を求められた．内容やレイアウトの点で前回の提案に対してあまり大きな改善が見られず，現状のままの原稿では市民向けのポスターとして印刷に採用することはできず，出版形態も含めて再検討を要するという結論になった．担当の山口理事ならびにリーフレット委員会，著者に対し，執行理事会の検討内容を伝えることとした．

Ⅱ　報告事項

(1) 運営財政部会：総務委員会

＜共催・後援依頼，他団体の募集等＞

１．「第12回子供のためのジオカーニバル」（後援）の終了報告．５つのセミナー（うち地質１），ブース展示11（うち，地質５ブース）を実施．昨年を上回る2,800名の来場者を得たとのこと．

２．東レ科学技術研究助成に応募した平野直人会員について，採択が内定した．

贈呈式は３月15日という連絡があったので,会長か副会長が出席する方向で調整する．

３．筑波大学「科学の芽」賞（後援）の授賞式・発表会（12/23）へは久田副会長が出席．

４．三菱財団「自然科学研究助成」の公募（〆切１/24）：News誌，HP, Geo-flashに掲載．

＜その他＞

１．2011年度自然史学会連合総会議事録の報告が斎木健一委員よりあった．

・連合主催の自然史講演会が，静岡県自然史

博物館ネットワークとの共催で開催．地質学系の講演も火山地形，古生物等の講演が３件．
・林原自然科学博物館を救うための活動，東日本大震災で被災した博物館標本を救う活動について報告．
・自然史連合の新代表にJAMSTECの北里洋氏が選出された．

＜会員＞

１．今月の入会者（５名）
正会員（２名）栗原憲一　栗谷　豪
〃　院割　（１名）入谷正人
〃　学生割（２名）内山雅貴　北野一平
２．今月の退会者（正１）松本拓也
３．今月の逝去者（名１，正３）
名誉会員：斎藤林次（2006/３/27）
正会員：西上原　航（2009/３/11），藤澤信一（2010/３/18），佐藤世章（2011/12/16）
４．11月末日会員数
賛助：26　名誉：71　正会員：4050（正会員：3855，院割正会員：183，学部割正会員：12）合計4147（昨年比　－95）
５．2011年版会員名簿：１月末の発行で校正中
・今年度末には，会費滞納による除籍者が80名ほど出る予定なので実質4000人．
　長く音信不通の方や，ご家族からの連絡がないと消息が不明となるので，特に古い会員の消息情報を，事務局に連絡して欲しい．
・会費は同じで，ニュース誌だけの寄付会員を作る（通常の会員の権利はない）ということも考えてはとの意見が出たが，定款を変える必要も出てくるので，検討課題とする．それとは別に，正会員に，雑誌を送らない（必要としない場合）オプションも検討課題である．

＜会計＞

１．支部，専門部会等に来年度の事業計画ならびに収支予算についての提出を依頼した．

(2) 広報部会：広報委員会（坂口）
・サイエンスライターに，新たに土屋　健会員が参加し，７名となった．
分野構成は次のとおり．
火山岩石　２名　構造地質　２名　地球物理　１名　古生物　２名
・サイエンスライターの第1回ミーティングを1/12（木）開催予定

(3) 学術研究部会：行事委員会（星）
１．行事委員の交代
現行過程地質部会選出委員：斎藤文紀会員（産総研）→川村喜一郎会員（深田地質研）．
２．2012年学術大会（大阪大会）
・大阪大会ニュースno.１をニュース誌１月号に掲載予定．
・トピックセッション募集締め切りを３月12日（月）とする．
・水戸大会同様，発表負担金を支払えばセッションでもう１件（１人最大２件）の発表を可能とする．
・上町断層を中心とする大阪都市圏地下構造に関するシンポジウム（近畿支部企画）を，竹村恵二会員を中心に検討中．４月理事会で詳細を報告予定．
３．2013年学術大会（仙台大会）
・12月17日開催の東北支部総会（福島大学）に出席し，全体スケジュールや見学旅行申し合わせ事項などを説明．

(4) 学術研究部会：国際交流委員会（石渡）
・審議事項３-１）および３-２）を提案

(5) 編集出版部会：地質学雑誌編集委員会（小嶋編集委員長）
１）今月の編集状況（１月６日現在）．
・2011年　投稿論文総数90編［総説19（和文18，英文１），論説47（和文42，英文２），ノート15（和文15），報告９（和文９）］口絵９（和文７，英文２）
・2012年　投稿論文総数１編［論説１（和文１）］口絵1（英文１）
＊2011年　論説には５/31までに投稿された短報を含む．
・査読中60編　受理済み　14編（うち通常号８　特集号６）

(6) 編集出版部会：アイランドアーク編集委員会（井龍編集委員長）
編集状況の報告が以下のようにあった．
・2011年の20巻のページ数は555ページとなり，予定に達しなかった．
・2012年21巻においても依然受理原稿の不足が続いている状況．
・2012年１月１日より委員長が交代した．
旧：井龍康文・前川寛和
新：伊藤　慎・海野　進

(7) 企画出版委員会（山口）
・超歴史年表の再投稿原稿，著者からは，２枚をポスターとする原稿が再々度提出された．

(8) 社会貢献部会（藤林）

(8) ジオパーク支援委員会（高木）
・「2012年地震火山こどもサマースクール」の日程：糸魚川市，８月18日（土）～19日（日）

(9) オリンピック支援委員会（久田）
・１/21（土）に委員会を開催する予定
・2016年に日本大会を招致すべく検討が行われている．
・３/25－27　地球でわくわく（アルゼンチン大会の本選）が行われる（ただし科学の甲子園が３/24－26で一部日程が重なっている）
・連合が公益法人となり，連合が窓口となれば，寄付集めの状況もよくなるものと考えられる．

(10) 震災復興事業プラン検討WG（高木・向山・藤本・斎藤）

(11) 連携事業委員会（渡部）
・12月22日にJNESの２回目の会議が行われた．

(12) 支部長連絡会議（渡部）
東北支部長の交代：川辺孝幸（山形大）（旧　竹谷陽二郎）

(13) 地質災害委員会（斎藤）

(14) 専門部会
・環境地質部会：地質汚染-医療地質－社会地質学会主催「第21回環境地質学シンポジウム」（１/24－25，早稲田大学国際会議場）を共催．
・構造地質部会：３/17-18仙台で緊急集会が行われる予定．日本の地質構造100選（朝倉，4000円台）の校正がでてきている
　地質学会の部会が単独で共催をする際のルール作りが必要．

(15) その他
・J-StageのデータがXMLの形式になっていないので，トムソンがサーチしているデータベース候補にのらない．Googleにもそれぞれの論文が当たってこない．J-Stageあるいは仕組みのよくわかっている人に編集委員長から聞いてみることとした．

2011年度
第８回執行理事会議事録

期　日：2012年２月11日（土，休）13:00～17:00
場　所：地質学会事務局
出席者：宮下会長　久田副会長　渡部副会長　藤本常務理事　斎藤副常務理事　石渡　井龍　小嶋　内藤　中井　平田　向山　山口　各理事，（事務局）橋辺
欠席者（委任状提出あり）：高木　西　藤林　星　坂口　各理事
＊定足数（12，委任状含む）に対し，出席者13名，委任状５名，合計18名の出席．
＊前回議事録の承認

Ⅰ　審議事項

１．津波堆積物のワークショップ開催について（関東支部提案）
　津波堆積物の判断基準等を固めるためにも議論をするのはよいので基本的にはやる方向．堆積学会は連合大会の時にワークショップを行う見込み．それ以降の適切な時期に他学会も巻き込んでワークショップを開催できるよう進めたい．行事委員長を中心にすすめる．堆積学会長でもある伊藤慎会員と相談して進める．
２．地質調査研修事業について
　研修事業については，関東支部に実質的な運営を委託することとしたが，関東支部から，実施にあたっての本部と支部の関係性，実施の枠組み体制などを明確にするように要請が出され検討した．
　研修事業は学会としての次期事業年度での重要な事業ともなるので，事業計画にも盛り込み，本部と支部との関係を明確にして枠組みをつくり，本部ならびに支部の仕事の切り分けをしてやっていくこととする．今回はパイロット的な位置づけとして研修事業の具体

的な事業計画は執行理事会がたて，執行理事会側の担当者も決める必要があることなどを話し合い，次回に以上のことを整理して提案することとした．

3．広報誌ジオルジュの発行，SNS友の会の名称，その他関連規則類

（SNS利用規則（修正版），広報誌編集規則，友の会運営細則）について広報委員会からの提案に基づいて以下のとおり検討した．

1）ジオルジュの発行部数について，創刊号は宣伝用も含め，10000部くらい必要ではないか，全会員に配布，博物館等で宣伝用においてもらうことを考える．

2）ジオルジュの取材費は質の向上のために必要．取材先から取材費が出るような場合は，金銭のやりとりは学会を通しておこなう．広告ページ（表三，四）を設け出版資金とする．広告は編集委員等の営業活動を認め，広告料の1割を（業界慣例）謝金として払うなどの方針で進める．

3）SNS友の会の名称は，「ネット地学部“ちーとも”」とする．

4）広報誌編集細則，SNS運営細則（資料1タイトル訂正）は親規則の有無も含めて関連を精査し，規則にするかどうか再検討する．SNS利用規則の修正を確認し，規則名称を友の会の名称に合わせることとする．

5）前回，開始することを決めたQ&A「地質学者に答えてもらおう」は，学会HP「地球なんでもQ&A」からリンクを貼る，Geo-flash等で会員にも周知する．

4．その他

1）山田科学振興財団研究助成への推薦希望者1名

「火星北極冠スパイラルトラフ形成機構の解明」（大阪工大　横川美和）

異論は無く承認した．

2）名誉会員の推薦手続き等について

推薦委員会等の意見も聞いて，懸案事項があれば理事会で共有し，今後検討していく．推薦基準の再検討は必要かもしれないが，いま今，大きな問題は出ていない．名誉会員の会員としての権利（投票権がなくなる）と義務（会費免除）については，シニア会員制度（年会費，大会費）等も考慮しつつ議論をしていくことになる．

3）支部選出理事について

選挙管理委員会からの要請を受けた，同数トップ当選者から，代表理事を選出する件は，理事会のメール審議により郵送によるくじ引きに決まった．

現在の地方支部区選出代議員は支部区のトップ当選者が支部選出理事になることが決められているが，複数の同得票者の問題等も含めて，支部代表理事の選び方については，次の選挙に向けて検討を要することとした．

4）超地球史年表について

査読者の意見によらない形で，新たな形態で再々投稿がなされた．

著者としては大きなポスターを望んでいる．これまで査読等や著者との交渉を担当してきたリーフレット出版企画委員会から，委員会の判断を超えることとして，出版の可否ならびに希望の仕様で出版を可とした場合は，当該企画については，執行理事会の企画出版委員会が直接扱う，ということが提案された．

検討の結果，今後は，提案どおり企画出版委員会の扱いとすることとした．また著作権の対応とJISへの対応，その他出版の形態や販路等について検討した．リーフレット企画委員会，著者に対しては，担当理事から説明し，返答する．また，その後メールによる議論で，新刊の白尾・清川著「全地球史」（岩波書店）の内容との関係について懸念が表明されたので，企画出版委員会で調査することになった．

Ⅱ　報告事項

(1) 運営財政部会：総務委員会

1．選挙管理委員会からの報告に基づき，中部支部区代表理事の選出方法について理事会にメール審議を要請，審議の結果，郵送によるくじ引きと決まった．選挙管理委員会に対し，郵送によるくじ引きを実施するよう要請した．

なお，これに伴い規則改正の必要性があるが，理事からいくつか意見も出ているので4月以降の理事会で検討する．

2．学術会議科学者委員会男女共同参画分科会より会員の男女比等についてのアンケートに回答（男女共同参画委員会堀委員長確認）

3．青野監事からの辞任届：定款上の整合性をはかるため監事任期の調整

今度の総会で辞任を承認し，選挙報告を行って，新たな幹事が承認される手続き．

＜共催・後援依頼，他団体の募集等＞

1．地球化学研究協会より「三宅賞」および「奨励賞」の公募（8/31〆切）：News誌，HP，Geo-flashに掲載．

＜会員＞

1．今月の入会者（7名）

正会員（5名）加納大道　石川　晃　岸本充弘　箕輪賢二　宮本　毅

〃 院割（2名）永谷方敬　惠口　響

2．1月末日会員数

賛助：26　名誉：71　正会員：4050（正会員：3854，院割正会員：184，学部割正会員：12）合計4147（昨年比　−91）

3．2011年版会員名簿を発行し，会員に配布した．

＜会計＞

1．合同大会の収支について，鉱物科学会との間で検討中，概ね了解点に達しつつある．

全体で69,374の黒字．参加人数比等のルールで鉱物科学会と割り振りを決める．

(2) 広報部会：広報委員会（坂口，内藤）

・サイエンスライターの第1回ミーティングを1/12（木）開催した．

・ジオルジュ創刊号ならびに友の会メルマガについて，具体的に検討をし，発行に向けて準備を開始した．

・ジオルジュ：創刊号5月10日発行，2回発行/年，フルカラー16p（うち広告2p），編集長　坂口理事（広報担当理事），創刊号：デスク笹沢，サブデスク　土屋，

・友の会（SNSによるネット地学部“ちーとも”）メルマガ：4月創刊，6回配信/年

(3) 学術研究部会：行事委員会（星）

1）2012年大阪大会関係

・見学旅行案内書の原稿（10コース分，投稿期限1月末）は，これまでに5件が投稿され，現在査読中．残り5件は投稿が遅れている．

・大会後援の申請準備を，大阪LOC事務局長が中心になって進めている（大阪府，大阪市，堺市の各教育委員会，主要新聞社等）．

・トピックセッションの募集を開始した（締切3月12日）．

Geology of Japanのトピックセッションを考える．

2）2013年学術大会（仙台大会）

・GSAとの共催について，石渡理事から報告．

・会場確保の都合上，とりあえず1日目に萩ホール（大ホール）を使う方向で予約．

(4) 学術研究部会：国際交流委員会（石渡）

とくになし

(5) 編集出版部会：地質学雑誌編集委員会（小嶋編集委員長）

1）今月の編集状況（2月9日現在）．

・118巻1号（58p）発行済み，2号　校正中

・2012年度投稿論文　総数6編［論説4（和文4），ノート1（和文1），報告1（和文1）］口絵1（英文1）

・査読中54編　受理済み　24編（うち通常号11　特集号13）

・1月号掲載の訂正記事の取り扱いについて，編集委員会における議論内容を確認し，必要なら再度議論してもらうことになった．

(6) 編集出版部会：アイランドアーク編集委員会（井龍編集委員長）

・編集状況の報告

・バーチャル特集号（プレカン特集）が春頃オープンにできる予定．

(7) 企画出版委員会（山口）

・超歴史年表原稿の再々提出版→審議事項4－4）へ

(8) 社会貢献部会（藤林・中井）

・地質の日：応用地質学会との共同行事について

行事内容，都内の見学コースについては検討が進み，実地検討も行った．

・高校生向けの地震に関するアンケートを来年度行う予定

(9) ジオパーク支援委員会（高木）

・昨夏の地震火山こどもサマースクールの収支は過不足なく収まりそうである．

(10) 地学オリンピック支援委員会（久田）

・1/21（土）に委員会を開催，委員会議事録，活動報告が提出された．

(11) 震災復興事業プラン検討WG（高木・向山・藤本・斎藤）

・事業完了の報告：歌津魚竜館化石標本レスキュー事業（永広）
　3月のニュース誌に報告が載る予定，今後は原稿が来次第，随時報告を掲載していく予定．

・下記の3件については支出済み
　微生物による放射性物質の除染の実証試験（高橋康則）
　関東平野内陸部の住宅地での盛土材質の相違による液状化要因の解明
　放射性セシウムに汚染された水田土壌のカヤツリグサ科マツバイによるファイトレメディエーション（榊原正幸）

(12) 連携事業委員会（渡部）

・原子力安全基盤機構からの受託事業について，事業報告書の進展が遅れており，契約での委会開催日程と報告内容の再確認と進行調整を，2月1日に内藤・渡部両担当が機構にて行った．その結果は学会委員への報告の通り．

(13) 支部長連絡会議（渡部）

・四国支部：「讃岐ジオパークをめざすシンポジウム」（3/3，3/4，香川大学）を後援

(14) 地質災害委員会（斎藤）

・来年度の予算等について検討中．

(15) 専門部会

・構造地質部会編集，朝倉書店出版「日本の構造地質100選」について，4月刊行予定で進んでいる．販売価格をおさえるために印税はなしとした．

2011年度
第9回執行理事会議事録

期　日：2012年3月17日（土）13:00～19:00
場　所：地質学会事務局
出席者：宮下会長　渡部副会長　藤本常務理事　斎藤副常務理事　石渡　井龍　小嶋　坂口　内藤　中井　西　藤林　星　向山　各理事，（事務局）橋辺
欠席者（委任状提出あり）：久田副会長　高木　平田（会長）　山口　各理事
＊定足数（12，委任状含む）に対し，出席者13名，委任状5名，合計18名の出席．
＊前回議事録の承認

Ⅰ　審議事項

1．大阪大会関係について

・見学旅行の実施方法：従来の実施方法が旅行業法に抵触する可能性があるため，弁護士や旅行業者の意見も聞きながら検討を進めてきた．法的解釈にはグレーな部分があることから，従来の方法で実施しても問題が生じることはないと執行理事会は解釈し，大阪では従来通りの方法で実施することを確認した．仙台大会以降の実施方法は今後検討する．

・見学旅行名称：「旅行」という名称から単なる物見遊山的な観光旅行と混同され，大学・会社で出張等の手続きの際に誤解されることがある．行事委員会では，見学旅行という従来通りの名称継続も含めていくつかの変更案が出された．執行理事会で検討した結果，大阪大会から名称を「日本地質学会巡検」とし（案内書は巡検案内書），関連規則（運営規則，編集規則等）変更も含め理事会に提案することとした．

・大阪大会の参加登録費等：水戸大会では鉱物科学会に合わせて非会員院生の参加登録費を値下げしたが，大阪大会でも元には戻さず，会員・非会員全ての参加登録費について水戸大会の設定を踏襲することにした．

・アウトリーチ関係シンポジウム（本部企画）：ねらいや内容が市民講演会（講演者は飯尾能久氏，三田村宗樹氏，金田義行氏の予定）および上町断層関係シンポジウム（近畿支部企画，代表世話人は竹村恵二氏）と重複しないよう，支部及びLOCと調整して講演者等を決める．

・年会でのポスター賞の授与については，運営規則に定めた賞の授与手続きと現状とが一致していないことが指摘された．検討のうえ，現状に沿った表彰を行うことが確認され，運営規則に，当該表彰に関しての但し書きをつけることとした．

2．年会回り持ち順変更に関する申し合わせ修正案
　前回の理事会での検討結果を受け，4月理事会に再提案する内容を検討した．文言の小修正をして最終案とした．

3．広報関係規則類の最終案確認
　ジオルジュ編集規則→ジオルジュ編集細則
　規程が細かいので，もう少し大くくりの規則とするよう修文の上，承認．
　ネット地学部“ちーとも”運営規則・利用規則 → 細則として承認する

4．地質調査研修事業の再検討
　研修事業実施内容，今後の進め方について検討．2012年度事業計画案に盛り込むこととする．

5．2012年度の事業計画基本方針，最終案
　名事業計画として，実際に実行することを盛り込む．いくつか追加，削除などの修正を加えて，理事会に最終の提案をする．

6．2012年度予算案
　予算案については，収支がマイナスの予算案は不適切．引当金等から手当てをして，収支バランスのとれた予算案にするよう，会計に検討要請をした．

7．小藤文次郎賞に関わる運営規則と各賞選考規則の矛盾について
　受賞の対象について，現行の運営規則では「会員」を，各賞選考規則では「論文」が対象となっている．この賞の場合は，論文を発表した会員を顕彰するのが適切として，運営規則に倣って各賞選考規則の文言を修正することとした．

8．W-B社からのIsland Arcの2013年以降冊子体の廃止提案について
　提案の趣旨は，時流に鑑みやむを得ないこととして承諾する，冊子体を購読している会員にはこのことを周知し，2013年度以降の購読費の請求はしない．

9．定款の変更

1）前回の理事会では定款33条2項末尾の変更として，現行「総会はこれを決議する」の部分を｛理事会は理事会規則により会長1名，副会長2名，常務理事・・・・を選任し，「総会に報告する」｝としたが，やはり総会を開くことの必要性は現行と同じであることが判明した．したがって，「代議員に報告する」と修正し，再提案することとした．

2）非営利型法人の重要条件として，定款上に，剰余金の分配をしないことを付け加えることとした．具体的には第54条に，以下の2項1号～3号を追加することとした．これによる理事会規則の該当部分も文言の修正をすることとした．

　第54条　この学会の財産の管理・運用は・・・・・財産管理運用規則によるものとする．
　　2．以下の各号を財産の管理・運用上の禁止事項として定める．
　　(1) この学会は，剰余金を一切分配することができない．
　　(2) この学会は，会員，役員もしくは使用人，基金の拠出者ならびにこれらの親族に対し，特別の利益を与えることはできない．
　　(3) この学会は，株式会社等営利事業を営む者または，特定の個人もしくは団体の利益をはかる活動を行うものに対し，寄付その他の特別な利益を与えることができない．ただし，公益財団法人または公益社団法人が行う公益目的事業のために，寄付その他の特別な利益を与える場合を除く．

10．理事会審議事項について

1）規則類の修正がいくつかあるので，関連規則に漏れがないよう，各担当部分について確認する．審議事項にすべきもの，審議の順序等について検討した．

11．総会議案

・議案については，理事会において決定．

・フォトコン表彰式との時間割
　13:30～で表彰式，講評を行う
　14:30～総会，総会終了後新理事会を行う．

12．その他

1）光記念館よりの後援依頼についての検討
　日程その他を確認した上で，諾否を決定することとした．その後確認，検討した結果，企画展「飛騨地方の活断層と地震」（2/22-12/11）の後援を承諾した．

2）韓国地質学会会長兪剛民氏の招待の件

高木理事経由で，兪会長の出席意思が確認された．招待を正式に承認する．

Ⅱ　報告事項

(1) 運営財政部会：総務委員会

1．東レ各賞の授賞式　3/15，平野直人会員受賞（東北大）→石渡理事出席

2．選挙管理委員会の要請に応じて，選挙立会人の代理人を1名選出した．
田中伸明会員（東京学芸大学　院生）

3．選挙管理委員会報告

・3/14　理事選挙の開票終了，中部支部理事の決定

4．国立国会図書館より：インターネット資料の収集等に係わる許諾について→承諾する

5．地理学関連学会連合の総会開催3/27（火）→地質学会はオブザーバー，都合がつけば藤本常務理事が出席する．

6．第5回ジオパーク国際ユネスコ会議式典への参加について：5/12開会式，5/15閉会式
長崎県島原復興アリーナ→高木執行理事にお願いする．

＜共催・後援依頼，他団体の募集等＞

1．第9回学術振興会賞受賞候補者の推薦について，受付4/18-20，学会〆切3/31→News, geo-flash, HPに掲載

2．TECHNO-OCEAN2012協賛依頼，2012/11/18-20，神戸国際会議場→例年どおり承諾

3．共催依頼「東海大学自然史博物館で第2回フォトコンテスト入賞作品の展示」→承諾

＜会員＞

1．今月の入会者（2名）
正会員院割（2名）楠　稚枝　宇都宮正志

2．1月末日会員数
賛助：26　名誉：71　正会員：4052（正会員：3854，院割正会員：185，学部割正会員：13）合計4149（昨年比　−87）

3．今年度末にての退会者100名

4．今月の逝去者（正1名）　打矢貞子（2012年2月20日）

＜会計＞

1．3/2に会系担当会議開催：2011年度決算予想，2012年度会計予算案の検討を行った

2．鉱物科学会との合同大会（水戸）の会計について．相手方に案を出して交渉中．

3．商標登録の費用について
ジオルジュとして商標登録をする．

(2) 広報部会：広報委員会（坂口，内藤）

・震災後1年プレスリリースを行った．

・「東日本大震災にかかる地質学の役割と対応について」．掲載令はない

・ジオルジュ創刊号の進捗状況について．
創刊号16p，1万部，経費70万/号（70円/部），23万+5万（室戸からの補助）．会員には配布予定．会員外販売は250円/部（内税）を基本に広報委員会考える．団体購入2割引を検討する（年2回）．

・ネット地学部“ちーとも”の開始について

・第3回フォトコン審査結果について
最優秀賞1件，優秀賞3件，入賞12件を選考した．

(3) 学術研究部会：行事委員会（星）

1）2012年大阪大会

・トピックセッションに11件の応募があった（締切3月12日）．現在採否を審議中．

・会期中に学会企画として国際ワークショップ「The Geology of Japan」を行う．会員に向けた開催趣旨になるよう，世話人に提案書を修正してもらう．

・見学旅行案内書原稿の投稿・査読状況．1コースのみ原稿未提出．それ以外のコースは原稿が投稿され現在査読中．

・今大会から演題登録システムは，㈱アトラスに委託することとした（初期費用10万，初年度経費20万円弱）．

2）2013年仙台大会

・2/27に第1回準備委員会が行われた．開催期間は9/13（金）〜15（日），巡検を16（月祝）〜17（火）に実施．巡検は現在13コースの案が出ている（7コースはGSA対応可能）が，コース数については行事委員長とLOCが相談する．鉱物科学会との共催はない見込み．

・GSA Global Meeting は，先方からの連絡が途絶えており，このままの状況が続けば開催困難．

(4) 学術研究部会：国際交流委員会（石渡）

(5) 学術研究部会：その他

・学術情報発信 緊急説明会（連合）2/17→藤本理事出席

・第1回科研費成果公開促進費対応臨時委員会（連合）3/15→井龍理事出席
連合は文科省の「国際情報発信力強化の取り組み，Open Acces, e-journal」のヒアリングを経て，上記の説明会ならびに委員会を開催し，新ジャーナル発行の意思を固め，既存の雑誌との棲み分けを明確にした．現状，科研費を受けて発行している欧文誌は，連合の雑誌に合併する，論文の対象によっては連合の横軸ジャーナルとして存続の可能性がある，学会独自で出版継続する場合には科研費はあてにできなくなる，など．IRAは科研費補助事業でもなく，発行元は出版社なので，原稿争奪戦に勝って生き延びていく必要がある．

(6) 編集出版部会：地質学雑誌編集委員会（小嶋編集委員長）

今月の編集状況（3月15日現在）．

・2012年投稿論文　総数19編［論説16（和文14，英文2），ノート2（和文2），報告1（和文1）］口絵1（英文1）

・査読中58編　受理済み　27編（うち通常号14　特集号13）

(7) 編集出版部会：アイランドアーク編集委員会（井龍編集委員長）

・編集状況の報告
やや，数が少ない状況で国際誌標準の25編/年になるか不安がある

(8) 企画出版委員会（山口）

なし

(9) 社会貢献部会（藤林）

1）地質の日行事

・応用地質学会との合同行事「街中ジオ散歩 in Tokyo」（5月13日）を実施

・千葉県立中央博物館において（地質学会主催），第3回フォトコンテスト入賞作品の展示（4月21日〜6月3日）

・東海大学自然史博物館（地質学会共催）で第2回フォトコンテスト入賞作品の展示（4月28日〜5月13日）

(10) ジオパーク支援委員会（高木）

・平成24年度申請予定地域：湯沢市，八峰町（いずれも秋田県），銚子，箱根，伊豆半島の5地域．

・世界ジオパーク申請予定：阿蘇ジオパーク

・平成25年以降の申請をめざす地域は7カ所，その他の検討地域は15カ所に上っている．

・地理学会等，学会間の連携も検討の必要がある．

(11) 地学オリンピック支援委員会（久田）

なし

(12) 震災復興事業プラン検討WG（高木・向山・藤本・斎藤）

なし

(13) 連携事業委員会（渡部）

・原子力安全基盤機構の受託事業は事業報告が完了し，受託経費の請求書を発行した．

(14) 支部長連絡会議（渡部）

・支部長の交代
四国支部：2012年度より石田啓祐（徳島大）（旧：臼井　朗）
西日本支部：2012年度より小林哲夫（鹿児島大学）（旧：宮本隆実）

(15) 地質災害委員会　（斎藤）

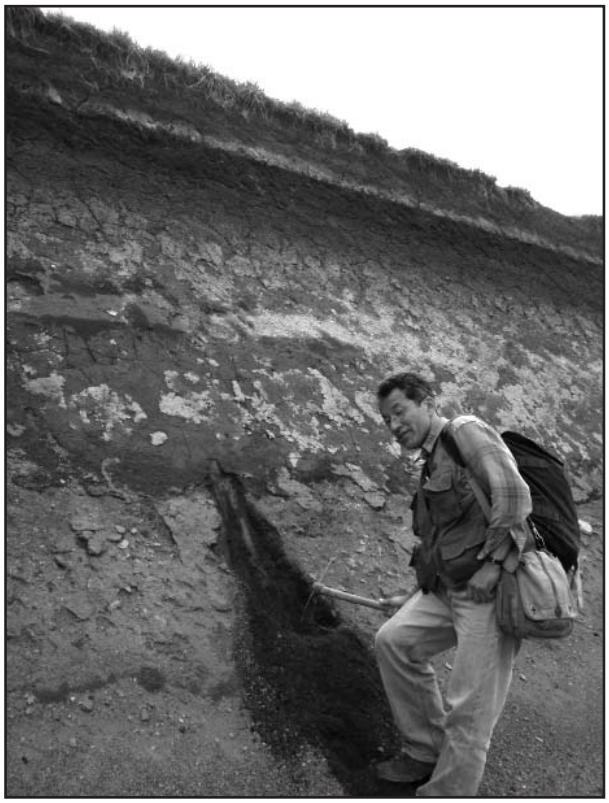
(16) 専門部会

・構造地質部会緊急例会：3月17〜18日　東北大学理学部

(17) 会長より

地質学雑誌査読結果異議申立書についての報告があった．

追　悼



長岡信治教授の急逝を悼む

2011年７月10日（日），長岡信治教授（長崎大学教育学部）が逝去された．享年52才，あまりにも早すぎる死であり，驚かれた方も多いと思われる．以下に長岡さんの経歴を簡単に記す．1958年９月25日，福岡県北九州市生まれ．地元，県立小倉高等学校を卒業後，立命館大学文学部地理学科卒，東京都立大学大学院理学研究科博士課程を修了され，1987年３月に学位（理学博士）を取得された．運輸省海上保安庁水路部を経て，1992年に長崎大学教育学部に助教授として着任，2008年に教授に昇任されて，ますます研究・教育に励まれていた矢先のことであった．2010年５月に霧島市で開催された国際野外集会“Active tephra in Kyushu 2010”でも，日本第四紀学会のテフラ・火山研究委員会の委員長として，またポスト巡検（Nagaoka et al., 2010）のリーダーとしても尽力された（Moriwaki et al., 2011）．また，同国際野外集会の論文集にも“遺稿”とでもいうべき霧島火山の噴火史論文（Nagaoka and Okuno, 2011）が受理されていた．私個人にとって長岡さんはまさに学兄であったが，日本国内外においてもテフラ研究の牽引者として今後の活躍が期待されていた．九州のテフラ研究を中心に，沖積低地から山地地形まで幅広い研究を展開され，最近では，九州の活火山のデータベースの構築にも意欲を示されていた．また，エチオピア，マダガスカル，タイ，韓国など海外のフィールドでも，人類学や古脊椎動物学の研究に層序学的調査から貢献されていた．地質学的手法と地理学的指向を併せ持った層序学を基本とした多角的研究は，日本でも希有な存在だったといえる．

ここで亡くなられる直前のことを記してみたい．前日の９日（土）にも，午後４時半ごろ長岡さんから電話があった．肝心の尋ねごとは，私にも分からなかったが，現在投稿中の論文のことや私の家族のことなど，他愛もない話をして電話を切った．そして，翌10日（日）午後８時半ごろ，長岡さんの携帯からの電話は，本人からではなく，彼の死を告げる奥様からのものであった．頭中では「えー」「嘘だろう」を繰り返すが，適当な言葉が見つからないまま電話を切った．その夜は，訃報を遅くまで断続的に発信し続けた．あまりにも突然で，かつ信じがたい出来ごとであった．11日（月）の夜には本通夜があった．昼間，私は勤務校の業務（高校訪問）のため，北九州市八幡にJRで出かけ，帰路の黒崎駅で駅弁「かしわ飯」を買い，遅い昼食を取った．大学に帰着後，福岡から高速道経由で諫早市多良見町に向かったが，激しい雷雨のためにやや遅れて到着した．既に読経は始まっていた．その後，お焼香をしてお棺の窓越しにお顔を覗いたが，やはりご本人であり，嘘ではなかった．お棺の側には，偶然にも私が昼に食べた「かしわ飯」が供えてあった．12日（火）の葬儀で，当日，ご家族と一緒にレジャーを楽しまれた後，自宅で休養中に体調が急変し，心筋梗塞のため不帰の人となったことを知った．そして我々は，親族が寄り添う霊柩車を式場で見送った．ご遺族は，お母様と奥様，そして，愛娘かさね（９才）ちゃんが残されました．長岡さんと直接交流のあった方は，娘さんのお話を少なからず聞かれたと思います．娘さんの成長を見届けられないことは，長岡さんにとって無念としか言えません．

この追悼文は，長岡さんが亡くなった直後から書き始めてはいたが，なかなか脱稿することができなかった．未だに信じ難い気持ちが残っている．現在，「長岡信治遺稿集」の準備を進めており，追悼文の投稿など関係各位のご協力を呼びかけたい．

引用文献

Moriwaki, H., Suzuki, T. and Lowe, D. J., 2011, Shinji Nagaoka (1958-2011). *Quaternary International*, **246**, 14-16.

Nagaoka, S., Miyabuchi, Y. and Okuno, M., 2010, Field Geology of Kirishima, Unzen, Aso, Kuju and Yufu-Tsurumi Volcanoes, Kyushu, Japan: A review and Field Guide for the Post-Conference Excursion of the International Field Conference and Workshop on Tephrochronology, Volcanism and Human Activity “Active Tephra in Kyushu, 2010”, 62p.

Nagaoka, S. and Okuno, M., 2011, Tephrochronology and eruptive history of Kirishima volcano in southern Japan. *Quaternary International*, **246**, 260-269.

奥野　充

写真　九重火山南麓のテフラ露頭にて（2010年４月撮影）

地質リーフレット 4

日本列島と地質環境の長期安定性

地質環境の長期的利用の観点から、日本の地質環境を分かりやすくまとめたリーフレット。
最新のデータに基づき、日本列島の断層運動、火山・マグマ活動等の特徴、そして将来予測の考え方を示しています。
多くの方々に活用して頂けることを願っています。

編集　一般社団法人日本地質学会　地質環境の長期安定性研究委員会
発行　一般社団法人日本地質学会
2011年1月発行　B2版　両面フルカラー

定価600円（会員頒価500円）
（20部以上の場合割引あり）

購入希望の方は、学会事務局まで。
e-mail: main@geosociety.jp
電話 03-5823-1150

そのほかの地質リーフレットシリーズも好評発売中！

1. 大地の動きを知ろう—地震・活断層・地震災害—
2. 大地のいたみを感じよう—地質汚染Geo–Pollutions
3. 大地をめぐる水—水環境と地質環境—

©一般社団法人日本地質学会　〒101-0032　東京都千代田区岩本町2-8-15　井桁ビル6F　電話03-5823-1150
Fax 03-5823-1156　E-mail：main@geosociety.jp　ホームページ http://www.geosociety.jp